
俺の妹はヤンキーっぽい美少女である

迷彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の妹はヤンキーっぽい美少女である

【Zコード】

Z3253Y

【作者名】

迷彩

【あらすじ】

ヤンキーっぽくて口調も態度も荒い。けど実はブラコンで甘えん坊な妹を持った主人公の日常をグダグダ書き殴つた物語。リア充爆発しろな話にしたい。

妹のヤンキーっぽさをすぐ見れる（前書き）

遂にやってしまった。反省しているが後悔はしていない
つまらない感じたらどうかアリウザのバックを押してくだされ

妹のヤンキーっぽさをすぐ崩れる

朝だ。

ただの朝ではない。

今日は…………月曜日なのだ

いや、だから何だって話なんだが。月曜日の朝ほどやる気の出ないものはそんなないと思つ。

月曜日の前日である日曜日が学生のほとんどが休みであるからこんなにかつたるい気分になるのだろうか？

前日に惰眠を貪った分、また面倒な日々が始まると感じられる朝…………少なくとも良い気分にはならない筈だ。

自分がもう少し朝に強い人間であるならこの気分ももう少し良いものなのかもしないと一瞬思ったが、起きる時間を考へるとむしろ自分は朝に強い人間だろうから関係無いのだらうと思いつなおす。

…………といふかいい加減起きますか。

○

現在時刻 AM 4:00

普通の学生が起きる時間としては大分早い時間だと思つ。まあ朝練のある部活をしている&家が学校から遠いとかそんな事情があればこんな時間に起きたりもする学生もいるかもしれないが、俺は帰宅部であつて朝練など無い。

それならどうしてこんな時間に起きているのかといつと……

バン！

「おい兄貴！ さっさと起きろ！ ランニング行くんだろー？ 飯も作るならもう起きる時間だらうが！！」

妹の世話をしなければならないからだ……

ああ、正直これだけでは意味が分からないし、お前説明する気あんの？って言われても文句は言えないからちゃんと説明するとしよう。

1、俺は妹の為に毎朝1時間ランニング＆筋トレ等のトレーニングをしなければならない

2、俺は現在家にいない両親の代わりに家事をしなければならない

つまりこういつ事である。

あれ?……このままだとまた説明不足だな……すまない、説明とかは苦手なんだ。

……えーと、1の妹の為に体を鍛えるってのはやんちゃな妹を体を張つて助けられる為つて事で、

2の両親の代わりつてのは、今は両親が海外にいるためで、（少し詳しく言うなら父親が単身赴任 母親が家事のできない父を心配して付いて行つた）妹も家事ができない今、唯一家事のできる俺が朝早くから料理の準備をしなければならないからだ。（妹の家事能力は酷い。おそらく父親の遺伝なんだろうなー……。）

以上が俺がこんな朝早くに起きる理由である。

「おい兄貴聞いてんのか!? 起きてんだつたらさつさと着替えて走りに行けよ! 兄貴が遅れたら飯も食えなくなるんだからよ!」

ちなみに何故 my sister が俺の部屋に来ているかと
いうと、今妹が言った通り俺のランニングが遅くなると朝飯ができる時間が遅くなつて、下手をするとき朝飯が食べられなくなる……いや、流石にそれは無いか?とりあえず俺が作る食事は食えなくなるが学校に行く途中にあるコンビニで買えばいいわけだし。

何故か俺の妹は朝飯は俺が作った物が良いらしく、店で買った惣菜とか俺の手が入っていない物（冷凍食品とかレトルト物とか）を食べると酷く機嫌が悪くなるのだ。

……まあ、正直これは悪い気はしない。

可愛い妹が自分の料理しか食べたくないといつのは結構うれしいものだ。

妹が中々の美少女であるところのもう一役買っている。

ちなみに何故こんな時間（午前4時）にこの子が俺の部屋に来ているのかというと、前田の夜に夜更かししていた俺がちゃんと起きているのか確認しに来たのだろう。

起きていなかつたら起こしてくれたんだらうなー。

……朝田覚めたらそこには美少女の顔とかリア充っぽい？

もつ少し目が覚めるのが遅ければ月曜の朝特有の氣だるさなど無くハッピーな気分で起きたものを！ いつも通りに田覚める我が肉体が憎いい！！

6

「…………おい兄貴聞いてんのか？ 無視か、あたしの事無視してんのか！？」

「…………無視しないでよおおににちゃん…………あたしの事嫌いになつちやつたのあ…………？」（メソ）

ちょっとおまつ！

「あー無視してないって、少し考え方してただけだから！ お前の事を嫌いになつたわけでも無いし嫌いになるわけ無いからー！」

「こんなに愛しい妹を嫌いになるなんてとんでもない！」

「…………ほんとう？ きらこじゅない？」

よーしよしそー、なんとか泣くのは回避できたな

「ああー、嫌いじゃ無いともー！」

「じゃああたしの事好き？」

「ああ好きだ、大好きだよ」なでなで

まつたく・・・可愛い奴だ、頭を撫でてやるつ

「……バツ、バツカジやねえの！？」妹に大好きとか言つてんじや

本当に可愛い奴だ。

「これで普段は荒っぽい言動をしていたヤンキー風といふと言われて、いるなど誰が思つだらうか？」

に違いない。

……俺限定でしか見せない姿だけど、これは勝ち組と考えていいんだろうか？

妹のヤンキーっぽさをすぐ崩れる（後書き）

何か直すべき所があれば感想にどうぞ。
ただし作者の心は硝子でできているため、あまりキツイ言葉の方はや
めてね。

中傷とも取れる物は無視、あるいは削除をさせていただきます。

改行で間を開け過ぎていたので修正＆本文の一部を微修正

・・・それにしても適当に書き殴つたがちゃんとできているだらう
か？
自分ではよく分からぬから中々不安になるのだけれど

俺と妹の一日の始まり（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけの作品です。
気に入らなかつたりした方は素直に戻るを押してくださいな。

俺と妹の一日の始まり

そして、とうあえず口課のトレーニングを終わらせて家に帰り、シャワーで汗を流す。

そうすると時間も少々経つてるのでそろそろ朝食の準備をしないといけない。

我が家は朝食は基本的にご飯、味噌汁、卵焼きの和食セットか、トースト、スクランブルエッグ、サラダの洋食セットを交互に作る。まあ大体がそうだというだけであってその時の気分で変えたりと自由にやっているんだけどね。

今日は別に変わった物を作る様な気分でも無いし、昨日は洋食セットを作ったので味噌汁の準備だ。

「このくらいこの料理はあいつも作れるようになつて欲しいもんだがなあ……」

そしたら兄妹で交互に作れるようになるし俺の負担も減るんだが。

「まああいつはちゃんとした掃除ができるようになつたばかりだし今はまだいいか」

……そう、そういうえばまだ一度も名前が出ていない我が妹の雪^{じゆく}は、

つい最近やつと掃除ができるよつになつたばかりだ。

それまでは散らかすだけ散らかし、それを片づけるよつなことはせず全部俺に丸投げ。

それを注意すればただ一言「うつせえ！」とだけ言い放つて逃げて行く。（“去つて行く”ではなく”逃げて行く”ので、あの子もこのままでは駄目だというのは分かつていたようだが……どうしても甘えてしまい直す気にならなかつたのだろう）

流石にずつとこのままでは駄目だと思い、零に言う事を聞かせる禁断の一言である「言う事を聞かないと嫌いになるぞ？」と言つてやつと直す気になつたのだ……まあその一言を聞いた途端泣きながら掃除の仕方を聞いてきた零を泣き止ませて、そこから掃除道具の場所やら使い方やら掃除の手順やらを説明し、失敗して涙目になる零をなだめて繰り返し教え直し……とあまり順調には行かなかつたが。

まあそもそも2・3日ですぐ出来るようになる物では無いしなあ。（俺が求めるのはちゃんと彼女が自分だけの力で最後までを行い、その後部屋を見れば”綺麗だ”と思えるような清掃能力であるからだ。そもそも掃除以前に散らかした物を片づけるという事すら出来て無かつたし）

結構な期間をかけてなんとか清掃能力を身に着けさせたのだ。
それまでは家事能力0どころかマイナスの奴に一から教えて、ち
ゃんと力が付いたのだから成功したと言えるだらう。

そこからすぐに料理にまで手をつけるのはまだ駄目だらう。

別に今すぐ身に付けなければこの家はお終いだあー！ってな状態でもないし、流石にまた「嫌いになるぞー」と言つて言う事を聞かせ

るよつな真似はしない。

俺だつてあの子を進んで泣かせよつと思つてゐるわけでは無いのだ。

何よりそんな連續で新しい事をやらせてもやる氣がないだらうし、強引にやらせてもちりちゃんと身に付かないだらうしな。

……妹の成長と今後の教育方針を考えている間に料理ができたようだ。

思考に耽つてゐる間にも俺の体は動き続けていたらしき。

流石にここ何年間続けただけの事はある。

我が友人に「君は立派な主夫だな」と言われるのも無理は無いのだろうな……。

あの時は否定したが自分でもそつ認識してしまつのはまづなんだろつか……。

○

さて、料理も完成したし我が愛しい妹を起こして行くとしよう。どうせ俺を起こしに来た後一度寝してこるに違ひない。（そもそも俺は起きていたが）

まあすることも無いのに4時に起きても寝るしか無いだろうから仕方ないけど。

「おーい、雪一？ もう7時だぞ一起きなさい」

シーン……

どうやら完全に熟睡しているようだ。
まあ 4 時に起きてからすぐにまた眠れたとも思えないし仕方ない
だろう。

中途半端に起きてから眠るとどうしても起きるのは遅くなるしな。
とはいって、寝坊させるわけにはいかないし……

仕方ない、直接起こすしかないか。

「 雪一？ 部屋入るぞー 」 ガチャツ

一応声を掛けて部屋に入る。割と大きめの声で言つたがまだ起き
はしないようだ。

雪の部屋は普段のヤンキーっぽい雰囲気とは違つて、とても女の子っぽい内装をしている。

黄色いクマのぬいぐるみや大きな丸い耳が特徴なネズミのぬいぐ
るみ、耳の大きなゾウの様な動物のぬいぐるみなど、某夢の国の住
人達が多い。

…… ところは嘘である。

何かのキャラクターだと、そもそもジャンルが決まっているわ
けでも無く、とにかく沢山のぬいぐるみであふれ返つているのだ。

実はあの子に掃除を教えたのは他の家事をしながらこの部屋を掃除するのがかなり大変だからだつたりする。

時間が経つとすぐに埃が溜まるし、ぬいぐるみを退けて掃除してもそれを元の場所に戻すのが大変なのだ。

どうやらそれぞれの配置が決まつてゐるらしく、場所を間違えると怒られてしまう。

何とか場所を覚えても雰の氣まぐれで配置が変えられたりすると田も当たられない事になるしなあ。（とこかよくこの数のぬいぐるみの配置を覚えられるな……）

これでも昔のように節操無く無い漁つたりしなくなつた分まだ楽になつた方なのだが、これを機に自分で掃除させよつといつ事になつたわけだ。

「やばい、またどうでもいい事を考えて時間が経つてしまつた……」

早く起ひさないと味噌汁が冷めてしまつしね。

雪のベットに近づいて行く。

「スウー……スウー……んー兄貴……」

ん？ 僕の夢でも見てるのか？ これは気になるな。
妹が兄をどう思つているのか分かるかもしね。

少し様子を見よう……今日は料理が早く出来たし時間には余裕がある（味噌汁が冷めたらまた火を入れればいい。そんな手間は俺に

対する評価に比べればどうとこうは無いしな)

「んう・・・美咲が兄貴を獲物を狙う野獸の目で見てる……兄貴はあたしが守つて……んう……あにゅきい……つへく……<……」

三點リーダーが多いわ！ じゃなくて俺に対する評価じゃ無かつたようだ。ちょっと残念。

そして後半は聞かなかつた事にしておけり……

ちなみに今出てきた美咲みさきといつのは零の数少ない友人であり、俺の後輩でもある女の子だ。

肩まで伸ばした黒髪に口元の黒子が特徴でかなり大人びた子である。

荒っぽい言動をとる零に恐れずに近づき、あの子の友人になつてくれた中々しつかりした子であり、俺は美咲ちゃんと呼んでいる。

美咲ちゃんの御陰でクラスで浮いていた妹はクラスに受け入れられたらしく、その時は零も嬉しそうにしていた（実際はかなりツンデレっぽい態度をとつていたが、ある意味分かりやすい）

俺に対する評価では無かつたし、いい加減起こすとしよう。

まずは閉まつてゐるカーテンを開けて太陽の光を部屋に入れる。

その後零が寝るときにつも抱いているイルカの抱き枕を抵抗を押さえて取り上げながら一言、

「ひらあ！ 朝だぞ零！ 起きなさい！！」

#お母さんみたいだと自分で思った。

「うー後5時間……」

「長いわッそんなに寝ると遅刻するだりがッ…」

阿呆な事をぬかしたのでぬいぐるみの代わりに掴んでいた掛け布団を強引に奪つてやる。

その勢いで my sister は『ドスッ』と鈍い音を立てベットから落ちた。

「…………何すんだ馬鹿兄貴！ ベットから落とす事ねえだろ！ 痺でもできたらどうすんだよ！」

「大丈夫だ、問題無い。というかお前の体に痔を作る様な事を俺はしないし、その高さで痔を作るほどお前の体は軟くない」

「あたしが起きるのが遅くなつたのは兄貴を起こすために早く起きたからじゃねえか。もう少し優しく起こしてくれよ…………」

んー…………確かにそうだったかもしれない。

いくら雲が阿呆な事を言つたとしてもそもそも悪かつたのは昨晩夜更かしをして今朝ちゃんと起きれるか心配させた俺だし、ベットから落とすのは流石にせつすぎだつたか…………。

「あー、確かにせつ過ぎだつた。すまん。お詫びに今度何か言う事

一つ聞くから許してくれないか?」「

「え、マジで? それって何でもいいのか?」

「ああ、俺ができる事なら何でもいいんだ。……でも常識的な範囲で頼むぞ?」

「そうか、何でもいいのか……何を頼もうかな……一緒に寝てもらうとか……」ブツブツ

「あー考えるのは後にしてくれ。ひとつと着替えて降りてこい、飯食つて学校行くぞー」

「はいはい分かったよ、じゃあ着替えるからさつと出て行けよなー」

「グイッ

「おひとつと、すぐ出て行くな。そんな押さなくていいだろ?」

「」

そして、とりあえず味噌汁を温め直すとするか、ぬるい味噌汁を飲ませて怒られたくないからなー。

こんなぱつと見て日常の些細なやり取りも、また新しい一日が始まったところ実感を与えてくれる大切なものなのであった。

俺と妹の一日の始まり（後書き）

相変わらず短いのは仕様。

ちなみに主人公が夜更かししたのは単純にネットで一次小説を読み漁っていたから。

それで寝坊しても自業自得だね。

俺の学校生活（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけの作品で、じぢ
る。

気に入らない事があつたりしちゃう方は戻るを押してくださいされ。

俺の学校生活

妹と二人で食事を取る。

今まで何度もあつたいつもの光景だ。

「兄貴、『ご飯お代わり』

「あいよ」

雲は女の子の割に結構な量を食べる。

……正直太らないのが疑問だが、そこはこの子の問題だろう。
今までそれで太りはしなかつたしな。

「それで雲、今日も放課後は部室か？」

「もぐもぐ……『ごくつ そうだよ。兄貴も来るんだろ？』

「まあ他にやる事も無いし構わんがそろそろ部活っぽい事をした方が良くないか？」

「別に良いじゃねえか。今までそれでやつてきたし、あたしは今を
気に入ってるしなー」

我が妹は部活に入っている。

その名も護身術部

何だそれ？と思うのも仕方がない。

この部は雲が作った部活だからだ。

部の活動内容としては名前通り、護身術を習つものだ。

別に何を習うか決まっているわけではなく、ただ自分の身を守れる
ように鍛えようっていうものでしかない。

部員は部の創設者であり部長である雲と部員である俺、美咲ちゃん

んの3人だけで、そもそも人数が一人足りないため”部”ですら無く、”同好会”となつていいのだが。

というか格闘系の部活は既に、

- ・柔道部
- ・空手部
- ・合気道部
- ・ボクシング部
- ・テコンドー部
- ・レスリング部
- ・相撲部

……と、正直俺もあまり把握できていないから全部は言えないがパツと思いついただけでこれだけあるのだ。

マイナーな物も加えればもっと沢山の格闘系の部活がある事だろうし、部長である零がまともに部員の勧誘をする気が無く、部の宣伝すらしていないためそもそも護身術部の存在すら知らない人間の方が多いだろう。

……というか俺の友人以外で知っている奴は全然いないと思う。

そもそもさつき言つた部活内容も建前でしかなく、道場があるわけでもないので、（元々まともにやる気がなかつた零が道場の使用申請をしなかつたため）ただ部室に3人で集まつて喋つたりするだけのものでしか無い。

これつて護身術部じゃなくて休憩部じゃね？と何度も思ったもんだ。

実際に部活の名前に合つような事は全くしてないし。

「せめてもう一人くらい部員を確保した方がいいんじゃないかな？」ず

つと同好会じや 格好付かん気がするんだが」

「もぐもぐ……『ごくつ 別に良いじゃねえか。あたしと兄貴、それと美咲の三人がいればさ。同好会だからって潰される訳じやねえしよ」

「確かにそうだけどな……」

まあ無駄に『テカイ学校だからその分部屋が余つてるのは当然なわけで……

というか護身術を学ぼうと思つてる人間は合気道部とかに行くだろうし、入る人間は早々いないか……

そもそも新入りが入る可能性があつたとしても零が怖いだろうし……零が知らない人間の入部を歓迎するわけないし、零を知つている人間は基本零を怖がつてゐるからなあ。

……部活（？）の事を考えていたせいで食事があまり進んでいいない、いい加減ちゃんと食べ始めよう。

「じやそつさま

「つてはやー？」

「いや、あたしが早いんじやなくて兄貴が遅いんだろ? また何か考え方してたのか?」

「いやいや考え方はしてたけど俺が遅いなんて事は……」

つてかまだ食べ始めてから20分しか経つて無い……つて20分!?

わーお、思ったより時間が経つていたようだ。
また無駄に思考に没頭してしまつた……。

「じゃああたしは先に行つとくからなー!」 ガチャツ

待つていてはくれませんよねー。

仕方ない、急いで食事＆戻り等の出発準備を済ますとじよつ。

C

学校に着いた。

俺が零の通り、学校はかなりでかい。

れ。 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

朝も言つた通り俺は説明とかが苦手なんだ。
スマン。

それよりもどいどい教室に行くなう、朝色々手間取ったのもあつて時間があまり無い。

キンコーンカーンコーン…

○

「ゼエ…ゼエ…死ぬ…嘘…死にはしない…俺は…ミラクル…」

何とか間に合いました。

超絶疲れたけど。

校門に入つた直後に本令の鐘が鳴つてそこから靴を履き替え、割

と遠い校舎まで行き
階段を上る。

それをずっと全力疾走で行つたせいでかなり疲れた。

……担任が少し遅れて来たおかげで助かつた。

「あーこれより出席を取るから、元気に返事するよ!」

しかし危なかつた。

俺のクラスは遅刻すると鞭で叩かれ……はしないが、担任が英語教師な為英語の課題プリントをやらされる＆英語の成績の意欲・関心の部分にマイナス評価が付くのだ。

クラスというか担任教師の方針だな。

普段の態度はやる気なさげなくせに、その態度に見合わないシビアな評価を付けやがる。

まあその分クラスに何らかの形で貢献するとプラス評価を付けてくれるし、まともな学校生活を送っている生徒にとっては割と良い先生だ。

俺だつて今日は少し遅れかけたけど普段は余裕を持って登校してゐるし。

「瀬川ー、瀬川はいないのかー？返事が無いって事は欠席でいいんだなー」

おうふ、ヤバい呼ばれてるじゃないか。

「あーすいません先生。瀬川十夜出席してまーす」

「おーいたか……つたく、次はもっと早く返事しちゃよー？」

「すんません」

……ついえぱずつと以前を書いて無かつたな。
俺の名前は瀬川^{せがわ}十夜^{じゅうや}だ。
これからよろしく頼む。

俺の学校生活（後書き）

お気に入り登録をしてくれている人がいる……だと……？
良いんですか、こんな駄文を登録しちまって？
こ、ここに後悔するんじゃねえぞコノヤロウ！

……登録ありがとね、ありがと。

俺と妹の昼休み（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけの作品である。

気に入らん事がある奴は大人しく戻るを押すのD.A.！。

- 場面の移り変わり
視点変化

俺と妹の昼休み

午前中の授業が終わって昼休みである。

昼食は購買で買う事もあるけど基本俺が作った弁当だ。零にも俺が作った弁当を持たせている。

「さて、それじゃあ食べますかね」

登校する時全力疾走したのもあって余計に腹が減ったぜ。

「あ、十夜。僕も一緒に食べていいかな？」

「ん？ 聰里か。勿論良いぞ」

こいつの名前はあかし明石聰里さとり同じクラスだ。

俺の友人で僕つ娘、背中の後ろまで伸ばした綺麗な茶髪をしている。

感情をあまり表情に出さないし、本人も一步引いたよう人に接するせいかあまり人と付き合いをしない奴だ。

しかも何故か女なのに男の制服を着ているという変な奴だ。

普通女子は可愛いって人気なウチの制服を着るんだが、どうしてこいつは男子の制服を着てるんだろうか？もしかして実は男の娘だったとか？

……いや、こいつ自身が女だつて言つてたしな。

「……何か失礼な事考えてない？」

「滅相もない。俺がそんな事を考へると思うか？」

「思う。……具体的には僕の服装とか性別とか」

即答ですか。

「まあとつあえず弁当を食べよつじやないか」

「誤魔化したね……まあいいや、さつせと食べよつ。僕は購買で買ったパンだけど」

「俺の作った卵焼き食うか?」

「貰えるなら貰うよ……（パクッ）ん、相変わらず良い腕してるね」

「日々の努力の積み重ねだな」

「それと愛情かい?」

「ああ……勿論だ。元々妹のために作つたついでだからな。美味しいができるよう努力するに決まっているじゃないか」

「（相変わらず妬けるね……もつ）まあその”妹さんへ”的愛情籠つた美味しい卵焼きを分けてもらつてるんだ、さつき失礼な事を考えていた事は帳消しにしてあげるよ。」

忘れてなかつたのか……しかも何か嫌みつたらしい言い方をするのは何故だ……

「といふか俺が失礼なことを考えていたつてのは確定なのか?」

「そうだよ。君の考えている事は分かるんだ。僕に対する事限定向か?（最も……僕を”女”として意識していないって事も分かつちやうんだけどね……絶対女として意識させてやる……フフッ）」

「つお！何だ！？何か背中にゾクツと来たぞー！」

「……流石、名前が”さとり”なだけあるな」

「君が僕について考える事だけだって言つたでしょ？それによれば人間の考え方が全部読めても楽しくないと思うんだけど」

「確かにそれはそうだな……ってか俺の考えてる事を読むのは楽し

いのか」

「”僕について考えている事”だつてさつきから何度も言つてるじゃないか。 ”僕の能力”と言つより”乙女の能力”だよ、あと楽しいね」

「乙女の能力ねえ……男の制服着てる奴が言つ事か？」

「だつてスカートも可愛いとは思うけど、あれってスースーするじゃないか。階段降りるときの下から来る男子の視線が煩わしいし、座る時も一々スカートを気にしてすわるのも面倒だしね」

「ふーん（そんな理由かよ）……まあ別に似合つてるしいか……」

「ちうさんつと」

「会話の締めを”似合つてるから”で済ますなんて……御馳走さまつと」

「何でもいいだろ実際似合つてるし、ボーグシユツテ奴？」

「はあ……もう良いよ……卵焼きありがとね。時間も迫つてるし、僕は自分の席に戻るよ」

「お、もうそんな時間か。楽しい時間はあつという間だな」「た、楽しいだなんて……フフッやつぱり君は天然ジゴロつてやつだね（ボソッ）」

「ん、何か言つたか？」

「何にも言つて無いよ～」スタスタ

ソラして昼休みは過ぎて行くのだった……

さてやつと退屈な授業が終わつたぜ。
早く兄貴が作つた弁当たべよーっと。

「あ、雪けちゃん。授業じゃ死んだよつて寝てたの、終わった途端に起きるなんて流石ね？」

「あ？ 誰だ…… つてあたしを”雪けちゃん”何て呼ぶのはあいつしかいねーか

「美咲が。お前も一緒に食うか？ 兄貴の作った弁当はやらねーカだなー！」

「もう、一口くらいくれただつてこいじゃない。いつも美味しいのに食べるんだから味が気になるのよ」

「そんなこと言つたつて本当は兄貴の作った料理を食いたいだけだろ？ がー…」これは兄貴があたしの為に作った弁当なんだから絶対やらねーぞ…！」

「（もう、…十夜先輩の作った料理を毎日食べられるなんて羨ましいわね）…………分かったわ。今回は諦めますよーだ」

ふん、どうせ明日も欲しがるくせに…… 兄貴はあたしのだ…… あにきい、あにきの愛情が詰まった弁当おいしいよお……えへへえ……。

「（凄い良い笑顔しちゃって…… また十夜先輩の事考てるのね。いつもこんな笑顔をしてたらもつとすぐ受け入れてもらえたでしょう。元々可愛い顔してるしスタイルもいいから羨ましいわあ……）ま、最初は十夜先輩目的で近づいたけど、彼女自身とは良い友達になれたし何よりこんな可愛い笑顔が見れるんだから役得って奴ね……（うふふ）」

「つお！ 何か背中にゾクッてきたぞ…？ 何だつてんだ…… つて

「あ……弁当食べ終わっちゃった……」

「別に家に帰れば先輩の作った料理を食べられるんじゅう? そんなに残念に思う事無いと思つけど」

「家で作ってくれる料理からも感じられるけど、弁当にはまた一段と兄貴の愛情が感じられるんだよ!」

「そ……そうなの……(また凄いブリーフケース度合)を見せてくれるわね……」

兄貴はあたしの為にトレーニングの後で疲れた体に鞭うつていつも美味しいハンを作ってくれるんだ。

朝ごはんだけでも手間が掛るのに、弁当も作ってくれるなんてやつぱり兄貴は優しいんだ!

弁当を作らずに購買で買って食べるついで手もあるの?、兄貴は自分から弁当も作るつて言つてくれたんだ。

兄貴……好きだよ。

まだこの気持ちが兄妹としてか異性としてかは分からなけり…きつとこつか答えを出して見せる。

だから……その時まで待つてくれよ……。

キーンローンカーンローン

「重ちゃん、チャイム鳴つたし早くお弁当片付けなさよ~私も席に着くから」

「わ、分かつてるよ!」

ちくしじゅう……良い感じで終わると思つたの?……。

余談だが、十夜と零の背中にゾクッと来たのは全く同じタイミングだつたりする。

俺と妹の昼休み（後書き）

どうでもいい事ですが、感想受付の制限をなくしました。
ユーザーでは無い方も感想を書く事ができます。

そういうえば人物設定とか書くべきなのだろうか?
……まあまだそんなに話数も無いしいらないか。

あ、一話のタイトルを修正しました。

俺と妹の放課後（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけの作品ですよ。
自らの意向に沿わない部分がある方は戻るを押す事をお勧めしますわ。

俺と妹の放課後

やつと今日の授業が終わった。
だるいわー英語本当にだるいわー……。

「お疲れ様。分かっていたけど本当に英語が苦手なんだねえ君は。」

「ああ、だつて文法がどうとかわけが分からんし、そもそも学校で習う程度の英語が本当に役立つかすら疑問だつてのに長文の読解なんてやらされたら気力がもたんよ……」

「テストの時はまた僕が教えてあげないと駄目なんだね?」

「ああ、頼むよ。俺の力じゃ勉強の仕方すら分からん。まあ赤点すら回避できればいいからさ」

「仕方ないな……ま、テストが近づけば教えてあげるよ。君は今から護身術部に行くのかい?」

「ああ、行かないと妹に怒られるからな」

ただ3人で集まつてくつちやべつてるだけだけどなー……

「そうか、じゃあ行つてらっしゃい(僕ももつ少し運動神経があれば入部するのに……)」

「おー行つてくるわー」

「じゃ、行くとしますかね。」



「へーいお兄さんがやつてきたぞー後輩達よー」ガチャツ

……つてあれ？ 雪がいない。

いつも俺より早く来てるの。』

「雪ちゃんなら今日は掃除当番ですよ、十夜先輩」

「……俺に言わなかつたつてことはあいつ忘れてたのか？」

「はい。授業が終わつてすぐここに来ようとしたけど、今日は月曜日ですからね。当番交代を忘れてたんでしょう

「ひょ」と

ウチの学校は放課後に掃除をする。

一週間決まつた場所を掃除して、週が済んだら別の人と交代するのだ。

「掃除がある事を知つて慌てて掃除場所に走つて行きましたよ。『

早く終わらせて兄貴に会いに行くんだー！』って

「ヤレ」で掃除をサボりぎみに雪ちゃんと行く所が偉いよなあ

あいつはヤンキーっぽいけど実際のヤンキー（この場合は不良の方）が合つてゐるか？）とは違つからな。

「まああの子の事ですしそく終わらせますよ

「じゃあ俺はそれまで読書するけど美咲ちゃんはどうする？..」

「そうですね……じゃあ先輩。膝枕してもらつていこですか？」

え？

「すまん、耳がおかしくなつたみたいだ。もう一度言つてくれ

「うふふ……先輩、膝枕してください」

「…………マジで？」

「マジです」

まあ別に良いか、膝枕ぐらい。
ただ眠たくて枕が欲しいだけなんだろう。
零にも何度かしてるしな。

「分かつた君の好きにしてくれ」

「じゃあ先輩、少しお借りしますね」ぼすつ

そう言ひやいなや美咲ちゃんは俺の太腿に頭を乗せた。

「男の膝枕なんか硬いだけだろ?」……

「そんな事ありませんよ、気持ちいいです。（先輩の膝枕……ああ
私今幸せだわ。何事も言つてみる物ね）」

「つか美咲ちゃん眠いのか？俺の膝枕なんて」

「（もう、相変わらず鈍感ですね……）さあ、どうでしょ?」

「俺はこのまま本読むからな」

「はい、先輩はそつしてください（それにしても先輩の膝枕安心するわ……）のままじや、本当に寝つけやつかも……」」

ＺＺＺ

あ、本当に寝ちまつた。

眠かつたんだな……可愛い寝顔してんなあ……。

つとど、寝顔を見るのは失礼かな？大人しく読書しましょうかね。

10分後……

「（ううー思つたより遅くなつちまつた……）兄貴ーいるよなー？」
ガチャツ

「……ん？お、やつと来たか雪。遅かつたな」

ピキッ

あれ、何か雪が硬直したんだが……どうしたんだ？

「おい、雪どうした？」

「……な……で……」

ん？

「なんで……」

「おい、本当にどうしたんだ？」

わけがわからん。

「なんで美咲が兄貴の膝枕で寝てんだよオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「つおー！つるせえー！きなり大きな声出すなー！」

「いや、これト「どうしてだどうして美咲が羨ましいズルイ兄貴の太腿つてか兄貴はあたしのなの勝手に膝枕で寝るなんて許せない羨ましいゆるせないうらやましいコルセナイトヤマシイコル……」怖いわ！一端落ち着けつての……」ペシッ

何か簡単には元に戻りそうに無いので軽く頭をたたいてやる。
つつーか俺の太腿も俺自身もお前の物じゃねえよ！

「あいてつ……」「うーー何で兄貴の膝枕で美咲が寝てんだよ……あたしだつて最近やつてもらつて無いのに……」

「いや、何か美咲ちゃんがして欲しことて言つからせ……」

「だつたらあたしにもしてくれよー！」

「あつああ分く「絶対だからなー?」分かつたつて……」

全く甘えん坊な奴だ……お?

「うーん……何ですか……うるわこですね……」

どうやら美咲ちゃんが起きたようだ。

「おい美咲！何でお前兄貴の膝枕で寝ようと思つたんだよー……」「あら、雪来たのね。そんな事決まつてるじゃないの……」「ふふふ」「ちくしょー……ちくしょー……（あたしも家で膝枕してもらえるだろうけどやつぱり悔しい……ってそういうえば！）……おい、兄貴！」
「うむーな、何だ？」

だからこきなり大きな声を出すんじやないつての……

「今すぐ帰るぞー早く帰つて膝枕してもらつからなー」

「あ、ああ……俺は良いが……」

美咲ちゃんはどうするんだ?

「あ、それなら私も帰りますね？今日は良い思いもできましたし……」

「ふふふ」

「（つづく、美咲め。笑つてられるのは今のうちだからなー）兄貴、今日の朝何でも命令聞くつて言つたよな？」

ん……？なんの事……」「あ、雪をベットからおとしてやつさ

たお詫びにーって奴か？

命令じゅなくて言つ事を聞くつて言つたんだが……まあそれはいいか。

「ああ、確かに言つたが……決まったのか？」

しかしリのタイミングで？

「ああ、今決まったよ……すばり、あたしの命令は【今日の夜一緒に寝る事】だ！」

「な、なんだつてーーー？」

いや、お前……

「高校一年生にもなつてそれほどいふ……」

「べ、別に良いだろーーー？……それとも、あたしと寝るのは嫌か……

?」（じわつ）

な、潤んだ田上で遺いだとーーー？

「べ、別にかまわん！一緒に寝てやろうーーー！」

「なーー？男女が同じ布団で眠るなんて不純ですーーー！」

何か美咲ちゃんが俺より動搖してるっぽいんだが……何故に？

「いや、別に兄妹だし構わぬ」「それでもですーーバカなんですかあなたはーー？」「おおおお！」

何か怒られた……（、・・・）シロン

「（あ、可愛い）……じゃなくてー）だめよ雲ちゃんー私は認めないわよーー！」

「はん！美咲に認められなくても関係無いんだからなー……兄貴はいいんだろ？」

「（、・・・）……え？ああ、構わないけど」

「ほらなーあたしは兄貴と寝るんだよー ほら兄貴、すぐ帰るべー！」ダツ

そう言つと雲は俺の手を取つて走り出した。
勿論俺と自分の分の荷物をもつて。

「くつこれで勝つたと思わないでよ雲ちゃんー」

「じゃーなー！アツハツハツハツハツハツハツハーーー！」

俺の手を握りながら中々の速度で走る雲の笑い声がつるさい。

つてかいつの間にか大分部室から離れてる。
聞こえるが微妙だけど一応言つておくか……

「じゃーなー美咲ちゃんーまた明日ーーー！」

また明日ーー

あつという間に離れた部室から、かすかに美咲ちゃんの返事が聞こえてきましたとや。

俺と妹の放課後（後書き）

何だか知らないけど、昨日は2011年1月11日だったらしいね。
……自分はポッキー買わないからいいけど。

俺と妹の帰宅後（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけのモンです。自分の気に入らんとこがある奴は戻るを押したほーがええんとちやういますか？

俺と妹の帰宅後

「よつしゃー着いたー！」

家に着いたと同時に雫がそり出んだ。

といふか

「お前一体どうしたんだよ、何かテンションおかしくないか？」

俺と寝る事になつてからずっとこんな調子なんだが……
そんなに嬉しがる事なんか？

「いや別に膝枕だけでも嬉しいのにそれ以上に兄貴と一緒に寝れる
のが嬉しいとか、そんな事はないんだからなーホントだぞ！？」

何といふあやといシンデレ。

だがこれを天然であるのが my pretty sister
の恐ろしい所である。

夜一緒に寝るつていうお願いの時も涙目上目遣いといつ高等テク
ニックを使つてきたからな……まあそれは別にいい。
可愛い姿を見れてラッキーとしか思えないし。

あの後俺達兄妹はあつという間に家に着いた。

雫に手を掴まれた状態でずっと走つていいたせいか手が痛い……
何度も離してくれつて言つたのに何故か離してくれないし。

「兄貴、膝枕はいつしてくれるんだ?」

「あーそつだなー……」

今日は帰つてくるのが早かつたし、晩御飯は昨日の肉じゃがの残りがある。

ご飯も冷凍してあるからそれを温めたらいいか……

つてあれ? やることがほとんど無いじゃん。

精々ほづれん草のおひたしを作る位か? それもすぐできる物だし。だつたらほとんど(全くと言つてい)時間が掛らないし、今やつても大丈夫だな。

「今日は飯の準備もほとんどする事が無いし、今からでもいいぞー」「マジで! ? やつた! ?

「でも美咲ちゃんみたいに寝ちまうなよ? 夜眠れなくなるからな」「えー別に良いじゃん。どうせ兄貴が起こしてくれるんだろう?」

「お前なあ……だつたら明日起こす時は水でも……こや、ベットが濡れるから氷をぶつかけてやひつか? それならお前も一発で起きれるだろ」

「つう一分かっただよ……寝なによつとするよー(びうせ今日は兄貴と一緒に寝れるんだからな……えへへ。兄貴の匂こと温もりに包まれて寝る……想像するだけで最高じゃねーかー)」「

「分かったならよひしこ」

わひとそれじゃ……つて

「お前が俺の太腿の上に乗るつて事は、俺は動けないんだよな? ……だつたら俺は何をしてればいいんだよ……」

「本でも読んでればいいんじゃねーのか?」

「いや、あれは今日読み終えちまつたからな……」

読み終わったのは今日の放課後だけど、昨日一昨日に大分読み進めてたし、授業の合間の時間にも読んでたし。

晩飯の用意の必要がほとんどないから、1時間位は時間があるんだが……その間ずっと手持ち手持ち無沙汰でいるのか？

零の学校生活は普段こいつから言ってくるし、本当にやる事がない。

読んでた本の次の巻はまだ発売していないし。

「つてかお前は俺の太腿に頭乗せてるだけで暇じゃないのか？いや、そもそも1時間膝枕してるなんて事無いよな……？」

「えー別にあたしは兄貴の膝枕で1時間とか余裕だぜ？マジで」

……えー、マジで？

「俺の太腿が大変な事になりそ'なんだが……」

人間の頭は結構重たいんですよ？

「なんだよ、兄貴はあたしと1時間も一緒にいるのは嫌なのか！？
……いやなのかよお……（メソ）」

「ちょ、おま！？」

何だこの既視感は！？
デジャヴ

朝にもこんなことあつたじやないですかーやだー！

……とかお前そんな泣き虫でしたつけー！？

「分かつた、分かつたから。1時間ぐらい大丈夫だよ、それに嫌なんて事もないさ。可愛い妹なんだから一緒にいるのが嫌なんて事は

無いと

「……うん、わかった。じゃあ膝枕して、話してる間に時間たつちやつたし」

「わかつたよ、全くうちのお姫様は甘えん坊だなつと」

だから大声を出すなっての……。

何だかまた雲のテンションがおかしくなつてきたので、強引に頭を太腿に乗せてやる。

……これで大人しくなるかな？

「うわー……あ……んむ……にゅ……（あ、兄貴……）」

お、大人しくなつたな。

卷之三

あれ……なんか動かなくなつたぞ？

「おーに輝さんへびついたんだー？」

「……………」

つこせつき寝なによりすてあるつて言つたばかりだらうが！

卷之二

「お前は向を寝てるんだつせつも寝ないよ」さあひて言つただろ

つ
！」

「そ、そんなの兄貴の膝枕が安心するのが悪いんじゃねーかつ！あ

たしは悪くねえ！あたしは悪くねえ！悪いのは全部兄貴の太腿だ！」

逆ギレですかー！？

「いやいや太腿が悪いって何だ！筋肉痛か何かか！？」

いやその突っ込みはおかしいと思ふんだけど

「大体聖なる焔の光みたしなキレ方すんしゃね！」よ
つてか何故知

「え……兄貴がやつてるのが面白そうだったから……それにアニメもやつてたし……」

■ ■ ■ ■ ■

「そ、うだな……」

この間ずっと膝枕状態です

そして、そこからはずつたりと時間がすぎて行つた……お互に会話はなかつたけど決して悪い雰囲気ではなかつたし、こんな時間を過ごすのも悪くはないだろう。



気が付くといつの間にか1時間経っていたようだ。
お互に喋らず、眠った訳でもないのに1時間も経つとは……正
直驚きだ。

「よし、それじゃあ時間だし晩飯の用意するか。零、テーブル拭いて皿出してくれ」

「……ん、分かった

さて、まずはほつれん草のおひたしを作るかね……

兄妹とまつたりとした時を過ぎした、まる……いやまあ夜
は一緒に寝るけど。

俺と妹の帰宅後（後書き）

ミ○トンミックスフルーツ味を炭酸水で割つて飲むと美味しい。

なんで○ルトンかつて？

……カ○ピスより安いからさ。

俺と妹の夜（前書き）

この作品は作者がノリと勢いでただただ妄想を書き書き殴つしていくだけの物です。

「それでもおく」と言つ方はどうぞ宜しくお願ひします。

「それじゃあ雪、風呂の掃除をしどこへれるか？俺は皿を洗つからな」

「分かった兄貴……風呂も一緒にに入るか？」

「はいはい冗談はいいから行つてきなさい、それに女の子が男と風呂なんて駄目だろうが。夫婦でも無いのに」

「へへっ分かってるよ、行つてくるぜー（せつからく勇氣を出して言ったのに……別に兄貴とならいんだけだな……）」

つたぐ、一瞬ドキッとしちまつたじやねえか……流石に風呂は駄田だらう。

まあ一緒に寝るのも駄目だと思つが、今更止めようなんて言つたら涙田どころか本氣泣きしそうだしなあ。

「あの子もいつかは誰かの嫁に行つちまうのかねえ……」

お兄ちゃんは許しませんよつーべきの馬の骨とも分からん男のもとに行くだなんて！！

まさに父親的思考である。

あの子は美少女だ。

綺麗な金髪を後ろで結び（ポニー・テールつて奴だな）、背も結構あつておまけに胸もある。

街を歩けば10人中9人は振り向くだらう。残りの一人はホモな。本人は好きな男とかいないみたいだし、今のところは大丈夫だろうが……いつかはそんな時もくるのかなあ……。

「ま、そう簡単に妹はやらんがな」

つちの可愛い妹が欲しけば、まず俺を倒していくがいい。
これでも喧嘩は強いぞ？

……よし、皿洗い終了。

一人分の食器を洗うのなんてすぐ終わるしな。

兄貴ー！風呂掃除終わったけどもうため始めんのかー！？

ん、あっちも終わったか。

んー風呂が沸く時間も考えればもうため始めたらいいかな？

「おー！スイッチ押しといてくれーー！」

分かったー！

さて、風呂を待ってる間に干してた洗濯物でも取り込むか。

○

「ん~ んーんん~ 」

鼻歌を歌いながら洗濯物を畳む。

普通零くらいの年になれば父親や兄弟と一緒に選択されたりするのは嫌だと思うが、零はそういうのを気にしない。

……流石に下着を畳むのは自分でやるが。

『～ お風呂が沸きました』

ん、どうやら風呂が沸いたようだ。

「おーい雪ー！？風呂詰まつたけどお前先に入るのかー！？」

兄貴が先に入つといってくれーー

ふむ、どうやら学校の課題が何かでもやつてゐみたいだな。

「分かったー！俺が先に入つておくーー！」

ちなみに俺はそういう課題が出た時は授業の後の休み時間（教室移動時間ともいうが）に進めて置いて、家ですぐに終わらせんよつにしておく人だ。

家事もほとんど終わらせたし、風呂から上がつたら残りの家事と一緒に終わらせるとしよう。

「さて、入りますかー」

「えー、どーこは……？」

晩飯を食つ終わった後、あたしは一階の自分の部屋で今日の宿題（課題）をやつていた。

内容は数学の教科書にある問題をノートにやるので、英語のプリントだ。

正直あたしはあんまり頭がよくない。

まあ授業で寝てばかりなせいなんだけど、元々頭がよくないからだ。

だからよく兄貴に勉強を教えてもらひんだけど……兄貴は数学と英語は全然できない。

だからこの一つは自分でやらないと駄目なんだけど……

「だーー！駄目だ、よく分かんねーー！」

くつそー……仕方ない、美咲が貸してくれたノート見るか……
あいつは頭がいいから、数学と英語は美咲によく教えてもらひ。
……あいつは兄貴と逆で国語と社会が壊滅してるけど……。

「あー、美咲のノートわかりやすいな……あいつの方が教師向いてんじゃねーか？」

美咲のノートを見ながらやつたらすぐ終わっちゃった。まだ英語が残ってるけど。

あいつはあたしに見せるの前提でノートを「写すから注釈とかがついてて凄く分かりやすい」。

今まで何度も教えてもらつたから私の理解力を完全に把握されるし。

おーい雪ーー！？風呂溜まつたけどお前先に入るのかーー！？

お、風呂か……まだ英語が残ってるし兄貴の後で良いかな？どうせすぐには終わらないし。

風呂あがつてからまたやんのも嫌だしな。

「兄貴が先に入つといってくれーー！」

分かったー！俺が先に入つておくー！

……さて、勉強の続きを行く前にあれを出しておかないとな……。

「ふう、良い湯であった……。」

あーもつぱりした…… もつぱり風呂はいいね、心も体も癒される。

「雪ー！風呂空いたぞーーーー？」

分かったー！

……さて、残りの家事と課題を終わらすか。
どうせすぐ終わるけど。

「よし、終わった！」

あとはテレビでも見とか。



『なんでやねん！それはおかしいやから、なんでそんな位置にそれが
くるんじゃーー！』

「……つまらぬ、最近の芸人はよろしくない……」

いや、ここからがよろしくないだけか……？

まあ、ほんしヲヤンネ川を渡る

「あーついぱつしたー。」

雲が風呂から上がつたよつだ。
パジャマ姿で入つてきた。

「あ、兄貴！」
「ん、何だ？」

いやいや俺はもうちょっとテレビを見て、そこからアヒで一次小説でも見ようと思つてたんだが……。

「いいじゃねーか、さつさと寝よづぜ?別にベットに入つてからすぐ寝るわけじやねーし(そんなすぐに寝ちまつたら兄貴の匂いとか温もりが堪能出来ねーし……つてあたしは何考えてんだー!)」

うおー！何か真っ赤になつて悶えだした！？

「おー、一
体どうしたんだ
?」

「うふ、これがアーネストの藏んだアーネストだよ。」

「兄貴は布団で寝てるだろ？だから落ちる心配す

布団使つてゐし兄貴の部屋で寝る！」「

「ちよ、おい！別にそんな無理やり連れて行こうとしたしなくてさ……」

つて聞けよ！？」

……そういって俺の手を掴み、また俺は無理やり連れて行かれてしまった。

さて、こつまでこの更新速度で行けるかね……。

俺と妹の就寝（前書き）

この作品は作者がノリと勢いでただただ妄想を書き書き殴つしていくだけの物です。

「そんな駄文で大丈夫か？」と言う問い合わせに「大丈夫だ、問題無い」と返答のできる方はどうぞ宜しくお願ひします。

俺と妹の就寝

「そおい！」ブンッ

「うわっふー！」ボスッ

「雲め、布団に俺を投げやがった……つていつか何で布団が敷いてあるんだよ。

俺はちやんと畳んでから襖の収納に片付けた筈だぞ……。

「兄貴が風呂に入ってる間にあたしが出しておいたのを……、とう！」ボスッ

それはまた準備がよろしい事で……つて飛び込んで来るな！？

「んあー兄貴いー……（ギュウ）」

「ちょ、くつ付くなー！」

「いいじやねーか、膝枕の時は全然くつ付けなかつたんだからさあ

……」

えー我慢してたつて事ですかー、そつだつたんですかー。

「え、まさかこの体勢で寝るなんて事無いよなー！？」

「つつ伏せの上に乗られても寝れる気がしないぞー！？」

「んー、確かにこの体勢じや兄貴の顔も見えないしなー……」

「いや、それ以前に掛け布団かかつて無いから。今の衝撃で全部横

に行つたから

「あ、兄貴の上に乗つた時すぐ掛けれるよつて半分に折つておいたのが駄目だつたかー」

「俺の上に飛び込んでくるまでの流れは全部計画通りかよー」

「……言つとくナビ、今更別で寝ようつてのは無しだからな? (むぎやう)

「うぐひ

「うぐひ、キツイ、力、強い、からひ

痛い痛い、締まるつ腕が回されてるわき腹が締まる
しかも息がし辛くてキツイ!

「あとくつ付いて寝るのが駄目なんてのも無しだからな! ? (ぐぎ
め)

「わ、分かつ、た、わ、かつた、からひ、いいか、げんに、はな、
せつ! 」

「分かつたならいい

「ぜえ…ぜえ…といあえず一端布団から出て、布団を綺麗に敷き直
すぞ」

今**の鰯折のせい**で(それから脱出しようとしたせい) 布団がグチ
ヤグチャになつちまつた。

「仕方ねーなー……兄貴そつち持つてくれ」
「はいはい……これでよし、と」
「じゃ、改めて一緒に寝よーゼつ」 もぞひ
「分かつたから少し落ち着けつて……」 もぞもぞ

そして今度**いじわらさん**とした体勢で布団に入つた。
……つてか

「やつぱ狭いじゃねえか……」

「ベットよつはいにじやねーか」

「こや、普通の仰向けで体の三分の一が出来ますてんや」

「じやあおひいが横向きに寝れば良いんじやね?」

「あー、そうするか」 もん

「な、あたしに背を向けるんじやねーよ!」

「こやこや、どうひこひこ。お前が横向きにすれまつて言ったんじやねーか」

「やうじやなくして、あたしの方を向けて言つてみただよー。」

え……

「マジで?」

「マジでー!」

そんな強調しなくても……

「こやでもそれじやあ誰でそれがくつ付いてるの?、おひいに正面なんか向いたら……」

だつて今俺の背中に俺の顔(これは鼻か?)が付いてんだぞー?。

「こから早くーわざと、ひつり、回す!」「ぐぐぐぐ……

「つかー!」 グルン

無理やつて体を回転せられたー?。

「えへへえ……あこか……」 もん

「ちよ、おこ、櫛」「……」

そんな正面から抱きつくな……

俺と零は身長差が10㌢ほどある。そこから零が少し下にずれてるせいか（多分零が自分からずれたっぽい）、今零の顔が俺の胸につづめられている状態だ。

しかも零は俺の背中に手を回しているから離れられないし、零が俺の胸に顔を擦り付けているせいで色々辛い。

何か腹の下あたりにとんでもなく柔らかい物が当たつてると…「…いかん！意識するな！妹に反応してしまっては兄貴失格だ…！」でも、ここに良い匂いするな……。

「んにゃあ…あこき…あにきこ…」（兄貴の匂いがあ…んふふ、あにきのにおいが…あー…、あにきあつたかいよお…）スリスリスリ…「く…（やばい、ずっとこの状態は拙いぞ…どうすれば…）」「ん…ねえあこきー…」

ん？何だ、俺の方を見上げて…ってかまた上目遣いか。暗がりだって言つのも相まって異常に可愛いんだが…。

なんか凄い幼児退行してる…？

「あ、ああ、なんだ？」
「あたま、なでて？」

「わ、わわわわ分かった」なでなで

「…」は言つ通りにしておかないと

「んふー…、んー…、めめつして…？」

「…また上田遣いだと…！？」

もうやめて！十夜のライフはもうヤロウ…。

……し、仕方ない。

「…やらなければ幼児退行している雫の事だ、また涙目上田遣いでトドメを刺されるか、泣きながら鱗折かなんかをされる気がする…ってか絶対どちらかをされる！そんな未来が俺には見える…！」

「ほ、ほり、ぎゅー……」

更に抱きしめながら頭を撫でてやればどうだ…？これならば勝てる筈だ！（何にだ）

「んにゃー…んこゅう…はあ、おにこちゃん…わたしこましあわせだよお…」
~~~~~

寝た…か…。

眠る間際のあの口調、自分を『わたし』と言つたのも、俺を『おにこちゃん』といったのも…

「少しだけど、昔に戻れたんだな…」

俺も今夜は今まで以上にグッスリ眠れそうだ…

眠っている雫を右手で抱きしめ、左手で頭を撫でてやりながら、俺はそう思った…。

お休み、  
雪。

## 俺と妹の就寝（後書き）

これは酷い。

元々酷いクオリティが更に落ちておりますぞ。

……こんな駄目な作者ですがどうかよろしくお願いします。

## 俺と妹の朝と過去（前書き）

後半はシリアル（笑）またはシリアルでいざる。

……寧ろそれ以下の何かかもしれん。

回想

## 俺と妹の朝と過去

「んう……むにゅ…………あむつ」かぶつ  
「うーん……んむむ……」  
「んこやー……んふー……はむつ」かぶつ  
「ん?……んー……」  
「んちゅひ、ちゅー…………」かぶかぶかぶ  
「ぐつ……んん?な……なんだ……?」

何だか耳に違和感を覚えて田が見めた。

「一体何だつて…………あれ?」

何か前が見えないんだが……顔に何か当たつてる?  
柔らかくて良い匂いがして……ってまさか…?

「雲の胸じやねえか!…?」ボソッ

小声で叫ぶとこの器用な真似をして完全に田が見めた。  
それによつてやつと大体の状況を察する……まだ前は見えないけど。

「あむつひりきじゅるー」

……どうやら雲が俺の耳をじやぶつてゐるらしい

「こつ、ひりきじゅるー」

おおかた「飯を食べる夢でも見てこらんだらう

「（うめき声）……んあー兄貴にー……あうきこー……」

あれー？俺の夢？何で俺の夢を見ると耳をしゃぶる事になるんだよ…あれなの？俺が雲の為に料理を振舞つてゐる的な……いやでも完全に甘がみされてるしな…

「とつあえず起きるか……よつと…おおー!?」「グイッ

起きようとしたら背中に回された腕にこもる力が強くなった。しかも自分の足を俺の脚に絡めてきたせいで完全に動けない。……せめて時間を確認したいんだが…。

「んあつあにわ…だめえ…んふ

何故か雲が嬌声をあげる……耳をしゃぶりながら。体を離すのは無理っぽいので、まずは雲が俺の耳をしゃぶるのをやめさせよう…さつきから耳元を舐めたりされるせいであつヒペチヤペチヤ音が聞こえていて、頭がどうにかなりそうだ。しかも時折雲が「あにきすきい…」だとか「あにきだめえ…」とか嬌声をあげるせいで、俺の息子が暴走しそうでやばい。妹に反応するなど許されない事だからな！

「よつと…む、こきなり離すのは無理か…ならば、

雲の頭をトーレ、つまり俺の胸の所に来るついでに体をすりあわせ。

「よーしよーし、良い子だ……」

あまり無理やつやつとくあるじづきながら抵抗されるので、頭

を撫でやつながら頭をさりとしてこべ。

よし、上手く行つた。

途中霧の口が俺の口と接触しそうになつて焦つたけど、何とか回避に成功したぜ。

「それで時間はつと……まだ2時じゃねーか……」

まあ昨日は早くから寝たし、霧の耳捕食事件（ノリで命名）によつて起されたから仕方ないんだが、俺が起きるまでもまだ2時間もある。

それまでじひあるか……。

霧の頭を撫でてやつながらつこへつ考えよう

「ここ……おこころやあん……」

…………そうだな、霧が今のよつヤンキーっぽくなる前の事を考えよ。

昔まだ小学生だった頃、霧は虚められていた。

特に理由があつた訳では無い。

強いて理由をあげるとすれば、霧が物静かで自分を表に出す事が苦手な女の子だったからだつ。

しかもこいついう時期の子供は、相手が大した抵抗をしなければ調子に乗つて更に酷い事をする。

最初はたまに机にちょっとした落書きを書いたりするだけだったのが、靴や筆箱など、物を隠したりするようになり、それから悪化して面と向かつた暴言になり、最終的には暴力を振るうに至った。

当時の俺も何度も零を庇つたりしたんだが、妹への虐無くすまでの事はできなかつた。

学年自体が違つたし、その頃の俺は喧嘩が強くなぐ、虐めのリーダーをしている悪ガキが空手をしているのもあつて自分よりも一つ下の子供を倒す事が出来なかつた。

だから俺は強くなろうと思つた。

零を守れるような強い男になろうと思つた。

でも時間が無い。

零は今虐められている。

そのリーダーの周りには3人の取り巻きがいたし、そいつらは別に強いわけでは無いが、単純に4対1という数の差は子供にとつて覆しがたい差だつた。

それでもやらなければならぬ。

勝てないとしても、毎日暗い顔をして学校に行く零をこれ以上見たくなかつたのだ。

せめて奴らに一泡吹かしてやりたかった。

前日のうちに消しておいた零の机の落書きを見て、あいつらが放課後、また落書きをしようとした所に待ち伏せした。

何か策があつた訳ではない。

俺はただあいつらに正面からぶつかつていった。

結果、俺は奴らにボコボコにされた。

いや、それより危険だった。

奴らのリーダーに殴られて、反撃しようとした所を後ろに回り込んだ取り巻きに突き飛ばされたせいで、俺は教室の窓ガラスに腕を突っ込んだのだ。

ガラスは割れ、しかも俺の手首がガラス片で切ってしまった。

手首にできた何故か白い傷口から、真っ赤な血が染み出るように溢れ出し、床に滴り落ちて行つたあの光景は今でも思い出せる。

その光景を見た奴らは小さな悲鳴をあげて逃げて行つた。

学校のガラスを割つた事と、何より俺の手首から滴り落ち、床に溜まつていく真っ赤な血に恐怖したのだろう。

窓ガラスの割れた音を聞いたのだろう、向かいの校舎の一回にある職員室から何人かの教師が駆け付けてきた。

そして手首から血を流し、体も殴られてボロボロな俺を見て、唯一の悪戯では無い事に気付いたのだろう。

俺を一先ず保健室に連れて行き、事情を聞いてきた。

勿論俺は先生達に事情を話した。

……今まで何もしてこなかつた教師も、事態を放置したせいで軽傷とは言い難い怪我人を出したとあつては動かすにはいられない。

直ちに虚めの調査が進められ、虚めをしていた4人は別の学校に転校していった。

手首の傷は10針縫う怪我だった。

幸い静脈を傷つけていなかつた為命には何の問題の無いものだつたが、その時の医者曰く「後数センチ横を傷つけていたら君は死んでいたかもしれないね。結構深く切つてるし、もし実際にずれいたら噴水みたいに血が出てきただろうねー」だそうだ……軽い口調で随分恐ろしい事を言われて、酷く背筋が冷たくなった事を覚えている。

勿論この事は零の耳にも入った。

自分のせいで兄が下手をすれば命に関わるような怪我をしてしまつたと思つたのだろう。あの子は酷く自分を攻めた。

……正直、その頃の自分が許せない。

妹を助けようとして、結局あの子を悲しませてしまつた事に酷く自分の弱さを実感させられた。

零も自分の虐められた原因が自分の弱さだと考え付き、口調や態度を変えた。

あの子にとっては、今のヤンキーの様な態度が強い物の姿だったのだろう。

子供の頭ではその程度が限界だ。

俺はもつと強い男になろうとして色々な格闘技に手を出し、妹を守りたいという俺の意思を知った両親も応援してくれた。何故か零もボクシングをやり始めたのは誤算だったが……。

こつして俺は喧嘩に強くなり、零は晴れてヤンキーの道を歩み始めたという事だ。

……まあヤンキーと言つても、喝上げとかはしないし、どっちかと言つとただ単に気が強くなつて暴力を振るつようになつただけだし、しかも俺には甘えてきたりするので、可愛い妹であることには変わり無いんだがな。

## 俺と妹の朝と過去（後書き）

実は左手首の怪我は、実際に私が負った傷だったりする。  
……原因は自業自得だけどね……。

そろそろ毎日投稿は出来なくなりそうですねー……地味に執筆時間が取れなくなつて来ましてね……。

指摘された誤字修正

## 俺と朝の口課の鍛練（前書き）

またがまたもや不慣れな描画をする毎回しなりついで……

戦闘描写など出来る筆があるまい……。

## 俺と朝の日課の鍛練

さて、過去の事はもういいだろ。」

今は俺も零も元気にやつてる。それで充分だ。

時間もそろそろトレーニングに行く時間が迫ってきたみたいだし、そろそろ布団から出るといよ。

「んー…あにきーーー」スリスリ

……まずは俺に頬ずりするのに夢中なこいつを何とかせんとな。

という事で、さつき零の頭をずらした要領で行くとしよう。

頭を撫でながら少しづつ体をずらし、その隙間にいつの間にか布団から出ている枕を入れ、るつ！

「…よし、後は体を抜けば…」

スルスル～っと…よし、行けた。

「うーあにきーーいかないでくれよーーー

え？起きてないよね…？寝言にしてはタイミングが…、もしかして俺の体と枕の感触の違いで気付いてんのかな…。

何か枕を抱きしめる力が凄い事になってるし。

さつきまで俺に込めてた力を『ぎゅー』で表すのなら、今は『グギギ…』って感じだ。

人間なら骨が軋む音を聞く事になるだろ。

「「あんな雰、トレーニング行つてくからな  
「んー……」ぎゅ

また少しの間頭を撫で続けながらひさしひ、ひさしひし安心したようだ。

さしあと行つてさしあと終わらせるところよ。

「行つてきまーす」

返事の無い事が分かっていても、そう呼びかけてから家を出た。

○

「はつはつはつはつはつは…………」

規則正しい呼吸と規則正しいペースを心がけて走り続ける。まず最初にするのは体力作りだ。

何事も体力が無ければやつてられないといつのは正しこと想つ。そのためにはやつぱりランニングが一番だろ？

足腰も鍛えられるし。

「あら～十夜君じゃない。おはよ～」  
「あ、静音さんおはよ～」

この人は響静音さん。

俺がランニングしているようにこの人も毎朝散歩している人で、何故こんな朝早くから散歩しているのか聞いたら「十夜君に会う為に、時間を合わせているのよ」と、はぐらかされてしまった。

歳は分からぬが（女性に年齢を聞くのは失礼らしいので聞いた事が無い）恐らく二十代前半だと思われるかなりの美人さんだ。

「今日もランニング？関心ね～」

「まあ日課ですからね……つていうかそれ毎日言つんですね……」

「あらあら、そうだったかしら～でも私は本当にそつ思つてるのよ～？十夜君みたいな良い子はあんまりいないから～」

「いやいや俺より出来た人間なんていぐらでもいるでしょうよ～」

「も～謙遜しちゃって…河原で別のトレーニングもしてるんでしょ～？」

「本当、良い男だと思うわ～」

「静音さんみたいな美人さんにそつ言つてもらえるとうれしいですね……というか、何で河原でトレーニングしてる事知つてるんですか？見せた事無いと思うんですけど……」

「あらあら～…、ひ・み・つ（はあと）」「

相変わらず読めない人だな……

「んー…何か十夜君から女の子の匂いがするわね～」

なんですと？

「なんですと？」

口に出た。

「匂つわよ～若くて可愛いく女の子の匂いが～」

まあ今日は妹と密着して寝てましたからね……とは言えない。

「もしかして～彼女？彼女ができたの？ねえどうなかしら、ねえ

？」

あれー？何だかいつものほんわりオーラが無くなつたぞー？

……え？本当に何が起つた。

本氣で怖いんだが。

「いや、多分妹の匂いじゃないかと…」

「ふーん？今までそんなんにしなかつたのに…」

「えーとそれは…」

「それは？」

「それ、『フルルルルルルツ』つおー？…すいません、河原でのトレーニングに移行しますんでー。」ダツ

危ねー！ケータイのタイマーに救われたーー！  
とりあえず全力でその場を去つた。

「…あらあら、逃げられちゃつたわ～。それにしても流してちやつて  
可愛いわね～…今度はちゃんと説明してもらひわよ～…んふふ  
」

やばい、背筋にゾクッと来た…前にもこんな事あつたよな…。

○

河原に到着した。  
とりあえずわかつた事は忘れて、トレーニングを始めようと  
思つ。

まあトレーニングと言つても、唯の筋トレが主なんだがな。

「295…296…297…298…298…299…300…つ  
と」

時間が有り余つてゐるわけではないので、基本的な筋トレを各300回ずつするだけだ。

……こんな事を毎朝してゐるのは俺の周囲には他にいないので、この回数が多いのか少ないのか良く分からんんだが……どうなんだろうか。

「さて、次だな」

これ以上回数を増やすと学校生活に支障をきたすんだよなー授業中に寝やすくなつたりとか。

「まあ自分のにはこれで良いと思つてゐし、これでやつていけるからいいだろ」

といふかこれより早く起きるのは流石に無理だしな…………。

「297…298…299…300…つ…よし、筋トレ終わりー！」

筋トレが終わつたら、実際の戦闘の練習をする。

勿論相手がいるわけではないので、仮想敵を想像してするだけだ。実際に戦つた不良たちを相手にした時の事想定して動く。

今回の敵は鉄パイプ持ち一人、ナイフ一人、素手一人だ。  
一人いる素手はボクシングでもしてゐるのかフットワークが素早く、拳のキレがいい。

鉄パイプ持ちを不良AとB、ナイフ持ちがCでボクシング経験者をDする。

「まずは殺傷力の高い奴を…つと」

不良Cが斬りかかってきたのでナイフをかわし、すれ違い様にナイフを持った手を掴む。

その手を上に捻り上げてそいつの体の後ろに回り込み、不良Aの方へ突き飛ばしてやる。

勿論その時にナイフを奪つておくのも忘れない。

その隙に不良Bが殴りかかって来たので、今度はその鉄パイプをかわして相手の懷に潜り込む。

後は相手の鳩尾みぞおちにその勢いで膝をお見舞いしてやり、その時に下がつてくる顎にアッパー・カット。

まあ良くあるコンボだな。

これで1人は完全ノックアウト。

少し息を整えていると不良Dが素早いフットワークで懷に潜り込んでこようとしてくるので、あえてこちらから距離を詰めてやる。距離を取ろうとすると思っていたのだろう、一瞬相手が怯むのでその隙にこちらが懷に潜り込み、苦し紛れに放つてくるパンチをかわし、その腕を掴んで背負い投げを食らわせてやつた。

ただそれだけでは終わらないので、倒れた相手の頭に蹴りをお見舞いしてやる。これで頭を揺らされて二人目ノックアウトだ。

そこでやつと最初に投げられた不良Cと、ことぶつかつて倒れた不良Aが復帰してきた。

……正直ここからは余裕だ。

一番の実力者だった不良Dが余裕で倒せた以上、唯の喧嘩殺法しかできない二人なんて今更相手にもならない。

殴りかかってきた鉄パイプを持ちの顔面をカウンターでぶん殴つてやり、もんどうつて倒れこむと同時にその鉄パイプを奪つてや

る。

そして後ろから突進してきた、今は素手の不良Cの腹に野球のボールの如く鉄パイプでフルスイング……突進してきた勢いもあってか『ドグシャアツ』と派手な音を立てて地面に倒れた。

不良Cはそれで気絶したので、何とか起きあがってきた不良Aの顔面に勢いをつけた張り手をお見舞いしてやる。

踏ん張る事もできない不良Aは、3mほど吹っ飛んで気絶した。

「ふう、こんなもんかな」

ちなみにこれは実際にあつた戦闘だ…そんな大したものじゃないから喧嘩かな?

まあ俺がそこそこ強いという事が分かつてくれたと思つ。まあ暴力何て振るわないに越したことがないんだが身を守るために必要な事でもあるだろ?。

妹の零もそちらの不良には負けないレベルの実力があるが、それでも何かあつた時俺自身の手での子を守れるように鍛えてきた。

……もし本当にそんな場面が来た時、俺はあの子を守れるだろ?か。

「ま、守れる守れないじゃなくて……守るんだがな」

さて、早く家に帰つてシャワーを浴びるとじよつ。

## 俺と朝の日課の鍛練（後書き）

前回言つたばかりなのですが、何やら本氣で執筆時間が取れなくなつてまいりましたので、投稿間隔が開きそうです。すみません。  
休日に作ったストックが無くなるまでは今まで通り毎日更新が続く  
でしょうが……それも少ないですしねー……多分2話分ほどでしょ  
うか……。

俺と妹のいつもの（？）朝（前書き）

「デーデーデーテーン… デーデーデーテーンアババババガガガガガガ… オーデ、ガ  
ンバル！」

「… ガンバル？ イヤ、 ガンバレタ… ？」

## 俺と妹のいつもの（？）朝

ジャ一……

「やつぱり汗をかいだ後のシャワーは最高だな」

まあ朝って事もあって、湯冷めに気を付けないとけないけど。

「……ふう、やつぱりした。今日も一日頑張りますか！」

風呂場からでて、出しておいた制服を着る。

ウチの学校の制服は私立なのでウチオリジナルの制服であり、俺含む生徒の多くが気に入っている物である。

女子と男子の制服には結構な違いがあり、男子の制服のデザインは学長が、女子の制服のデザインは教頭が担当して作ったとか。

男子の制服は格好良い系で、女子の制服は可愛いと結構な人気があり、デザインの方向性にもある程度の違いがある。

男子が黒と白の一色だけで、シャープさや格好よさを考えて作られているのに対し、女子は黒を基本とした赤と白という落ち着いた、しかし可憐さが引き立つようなデザインになっている。

まあこの説明を聞いただけではそんなにおかしい部分は無いと思うだろう。

しかし今のデザインに決定する前……つまりデザインを決める会議をした時には、かなりの論争がまき起つたというのは、この学校では有名な話だつたりする。

どういう事だか知らないが、学長と教頭の作りつけたデザインが派手すぎて、学校の制服として機能するような代物ではなかつたとか。

学長は本来もつとカッコいい物を作りたくて、教頭はもつと派手な物が良かつたようで、当時の論争を知る学年主任の話を聞く限りではそれはもう酷い物だったそうだ。

実際にどんなデザインだつたのかは知らないが、教頭曰く「二人の作つてきたデザインはそれはもう酷かつた。学長のはコスプレにしか見えなかつたし、教頭のはアイドルでも着るようなフリフリの付きまくつた謎のドレス（？）つてかんじだつた。一人も中々譲らないし、正直今のまともなデザインになつたのが奇跡だよ」…と言つ事らしい。

ちょっと見てみたいかもしれん。

「よーし、洗濯終了、次は朝飯の用意だな」

ふつ、実は制服の事を考へてゐる間、洗濯物を洗濯機に入れて起動、洗濯が終わつたら大まかの皺をとつてからベランダに干す。という事を流れるような手際で行つてきたのだ。

……やっぱ俺主婦だわ……。

「えーと…昨日は和食セットだから、今日は洋食セットか…」

まずはスクランブルエッグから。

ボウルに卵を割り、そこに塩コショウ、牛乳等を加える。

それをフライパンに流し込み、そこに一口サイズに千切つたチーズを加える。

雫はこのチーズ入りスクランブルエッグがお気に入りだからだ。ある程度固まつたら火を弱め、軽くかき混ぜながらゆつくり焼いていく。

さて、スクランブルエッグが出来たので今度はサラダ作りだ。

といつても手の込んだものではなく、レタスを手で食べやすい大きさに千切り、いくつか作つてある茹で卵を半分に切つてレタスの上に並べる。更にシーチキンを上に置いて市販のドレッシングを掛ければそれで終わりだ。実に簡単である。

まあここまで出来れば後は食パンを焼くだけなので、焼く前に電気を起動しておひつ……どうせすぐには起きてこないだらうじ。

「全く、どうしてあいつは俺を起こす時以外あんなに寝覚めが悪いんだか……」

昨日のように俺を起こす時は、俺が朝の鍛練をする朝4時なんて時間に起きてきたのにな……。

それなら普通の時間にも自分で起きれるだろつ……。

一度、「何でお前は普段起こしてもらわないといけないのに、俺を起こす時はそんな朝早くに起きられるんだ?」と聞いた時は「兄貴のためならいくらでも頑張れるんだよ!……それに、兄貴の寝顔も見れるし……」と兄としては嬉しい返答が返ってきた(後半は聞こえていない)

まあつまり、俺の為には頑張れるけど自分の事になると面倒くさくなるという事だろう。

あまり良い事ではないが、しばしばこの状態でやつてこいつと思ふ……それに、隣の寝顔は可愛いし。

「そんなこと考えてても仕方ない……起こして行くか……」

○

はー、それでは可愛こ可愛い妹の部屋へやつてきましたー。

……いや、今日は俺の部屋だけじゃな……。

とつあえず

ガチャ

音が『ガチャッ』ではないのは、俺の部屋の扉が横開きだからだ。  
別にどうでもいいか。

「スウー…スウー……んー（モジッ）」

「やつぱり爆睡しちゃるな……」

しかも俺が滑り込ませた枕に顔をうずめて、たまに深呼吸している  
ようだが…、寝相にしては意味が分からん…。

まあとつあえず起こすか

「おーい雫？ 朝飯が出来たから起きろー！」

「…………いやあ！」

寝言で起きぬ…だと…？上等ではないか…。

「いいから起きろー！ 学校遅れても知らんぞおい！ 唯でさえ成績  
が悪いのこ、これ以上成績を下げたら留年に繋がりかねんぞー！」

「うあー…うぐう…（モゾモゾッ）」

ん？後一息つぽーな。

「早く起きなこと置いて行つまうがアーハーー」（ズブシッ）

後頭部にチヨップをかましてやる。

流石にこれで田は覚める筈だ……。

「あいたあ……あこ、あへ、うひ、今のは夢だったのか……？」

「何の事が知らんが、とつと起きなさい。飯が出来たぞ?..」

といふか何故そんな大事な物みたいに枕を抱きしめていろんだ……。

「ほひ、枕を離しなむ。布団片付けるかひ」

「え? やだあ……」

えー……

「……何故に?..」

「だつて……その……えつと……うぐう（兄貴の匂いがするから）……何て言  
えねーよー。」

だから向でそんなに大事そつて抱きしめてるんだよ……何か抱きしめる力強くなつたし……。

「さつわと離せつて……じゃあお前の部屋まで抱っこして運んでや  
るつてのはどうだ?..」

理由は分からんが、いつ聞えまちやんと起きてくれるし。（普段は  
雲が着替えてから一階に運ぶ）  
まあこの手を使うのは用に一度使つかひつけて位だがな。

今日はすでに俺の部屋（一階）で寝ていたから、一度上の雲の部  
屋に連れて行かないといけない。

着替えは雪の部屋だからな。当たり前だけぞ。

「うー……、嘘じやなこよな？」

「ああ、嘘じやねーよ。……と言つてお前、昨日一緒に寝た事とか、今抱つて言つて聞いて事とか、そんなに甘えん坊だつたっけ？」

いや、甘えん坊なのは昔からだつたが、……」こんなに露骨では無かつたと想つんだが……。

「なー?」「いや、うつセーヨー! 兄貴には関係ねーだろ! ?」

「いやいやお前が甘える対象俺だから。どこにも無関係つて言える要素ねーから」

「つぐづぐ……兄貴はやつぱり甘えられerのつて嫌か……?」

何を言つたらバカな事を…

「可愛い妹に甘えられるんだ。嫌なことないあるものか、寧ろ嬉しいぐらいだよ。……いつまで甘えてくれるのか分からんがな……(ボソッ)」

「そ、そうか……えへへ、なら良こだろ? もう、早く抱つこしてくれよ! 嘘じやねーんだろ?」

「はこはこ、お嬢様は甘えん坊ですね~」ヒョイツ

……全く、本当にここまで甘えてくれるんだらうな。

俺と妹のいつもの(?)朝(後書き)

ガンバ……れない……俺頑張ったよ……。  
もう一話分くらいストックがあるぜよ。

**俺と妹の通学風景（前書き）**

ストック写きた……

## 俺と妹の通学風景

「 つと、着いたぞ。着替えたらすぐに降りてこいよ？」

「 パン焼いとくからな？」

「 分かつての。焦がすんじゃねーぞ？」

「 ふん、この我を誰だと思っているのだ雑種？　この程度の事、王たる我が片手でも成して見せよう」

「 いやいや、食パン焼くのに王は関係ねーだろ……つていうか誰でも片手で出来る事じゃねーか……」

「 いやー何だかあのキャラ嫌いになれなくてな…………」

「 あたしはやっぱ騎士王の女の子かな…………」

「 そういうやお前と同じ金髪だもんなー……つて、俺の好きな英雄王だつて金髪じやねえか」

「 いや、英雄王はある天上天下唯我独尊を地で行つてるのが良いんじゃねえか」

「 いや兄貴、天上天下唯我独尊つてさ、自分が最も偉いって意味じやねーぞ？」

「 え？　マジで？　……いやいやそれは無いだろ…………

「 そんな訳無いだろ。天上天下（「*ry*　つて自分が一番偉いって考えを持つてて、傍若無人な行いをする奴の事なんだろ？」）

「 いや、それは間違つてるんだつて！」

「 それ誰から聞いたんだ？」

「 美咲」

「 む、美咲ちゃんか…　合つて無いとは言い切れんな……

「 でもそれが合つてるかは分からないんだろ？」

「あたしもそう思つたからパソコンで調べたんだけど… Wikipediaでは違うって書いてあつたぞ？」

むむ…それは…むう

「そう…なのか…知らなかつた…………」

「まー他の奴に恥ずかしい所見せる前に分かつて良かつたんじゃねーか？」

「まあ、そう思つておくか…」

「じゃあ疑問も解消したし、あたしは着替えるからな

「おう、じゃあパン焼くとするかー」

バタン

背後でドアが閉まる音を聞きながら、俺はリビングへ向かつた。

○

「さて、それじゃーーいただきます」

「いただきまーす」

ガツガツ アッアニキソレアタシンドダゾ！  
イヤコレオレンダカラ！ オレノサラニーノッテタカラ！？

というわけで朝食終了。

まだひたすら食つてただけだしね。

○

「さて、それじゃあ出発しますか  
「今日ははちゃんと余裕持つて行けるんだなー」「  
「昨日はお前先に行つちまつたからな……」  
「いやいや、あれは兄貴が考え方してたせいで遅れたからだろ?  
あたしは悪くねーよ」

ぐつ言い返せない!

「……じゃあ、行つてきまーす……」  
「行つてきまーす」

俺たちがいなくなれば、誰も返事をする事は無い。  
それでも長年やつてきた習慣だから、どうしても呼びかけはしないとね。

○

テクテクテク…  
テクテクテクテクテク…  
テクテクテクテクテクテクテクテク…

話題が無い…。

流石にこのままずっと無言のままってのは嫌だな……。

「雫よ。可愛い我が妹よ」

「かつかわつ！？ … ゴホンッんんっ …… 何だよ」

「話題が無い。お前の方は何かあるか？」

「えー… そうだなー…、別に何かある訳じゃないけど、部活の事でも話すか？」

「部活の話し？ それってこの前しただらう。結局現状維持一みたいな感じでさ」

「いやまあそうなんだけどよ… やっぱり部員が3人だけってのは少ないかなーってさ！ アハハ……。（兄貴と美咲を2人きりにするのが嫌だなんて言えないし… やっぱりこの言い方だと違和感あるかな……）」

「まあお前がそう思つたんならいいさ そうだな、俺の友人で、今部活に入つて無い奴がいるんだけどな？ そいつは性格も悪くは無いし、そいつを部活に入れるつてのはどうだらう」

ちなみに『そいつ』ってのは聰里アリの奴の事だ。

あいつは護身術部があんなにグダグダだつて事も知らないから今まで入るとは言つてはこなかつたけど、それでも何度か入りたそうな顔をしていた。たぶん自分の運動神経的に無理だと思つてたんだろう。

「…そいつはあたしの事知つてんのか？」

「ああ、俺の妹も入つてるつて言つた時、『君の妹… ああ1年のヤンキーみたいな娘だね？僕だつて知つているよ。ある意味有名人だし』って言つてたし、知つてるんじゃないか？」

「あたしの悪名を知つて入つてくるのかよ」

「別に大丈夫だろ。お前の評判は最近良くなつてきたし、そもそもあいつは他人から聞いた評価で人を嫌うような奴じゃないしな。」

「そうか… だつたら、今日は体験入部つて事で来てもらつて、それ

から入部するか様子を見るか……」

「それが良いな。大丈夫だとは思うけど」

「どうせ聴里の事だ、『へえ、いい部活じゃないか。グダグダ時間  
を潰すだけなんて僕にとつてはいい部活だよ』みたいな事を言つに  
違ひない……。

「これで兄貴の言つ奴が入部したら、やつと『同好会』がとれて、  
『護身術部』になるわけだな！」

「そうだなー……ってか、今まで『護身術同好会』だったんだな……」

「やっぱりダサイよなー……何かダサイよなー……」

「ま、申請もあるから正確に『部』になるのは明日だろうけど」「  
つてかそいつが入部するかも分からないのに、何で兄貴はもう決  
定みたいに言えるんだ？」

「俺はあいつを信頼してるんだよ」

「ふーん……そうか……（女だったら注意するべきだけど……兄貴は  
『僕』って言ってたから男だろうし、大丈夫だな）」

「お、話してたら学校に着いたぞ。やっぱり無言より何か話してた  
方が早く着いた気がするな」

「んー……（でも今まで私と美咲、兄貴の3人でやつてきたんだし  
な……どうなるかなあ……）」

「ん？ 霊の奴何か考えてるのか？ まあいいいか……。

さて、今日は余裕があるし、HRが始まるまでの時間で聴里に話  
をするとしますかね。

**俺と妹の通学風景（後書き）**

明日は更新できないと思われる。  
たぶん。

## 俺と聰里と部活勧誘（前書き）

毎日更新終了のお知らせ

今日は悪夢を見た。怖い。

## 俺と聰里と部活勧誘

「何だつて？ 僕に部活に入れだなんて… 本気かい？」

「いやいや、別に入れとまでは言つて無いだろ。ただお前なら良いかなつて思つてさ」

「言いも何も君が入つている部活は護身術部だりう？ 僕の運動神経じゃ出来っこないじゃないか」

教室に着いた俺は早速聰里を部活に勧誘しようと話していく。

まあまずは護身術部の実態とかを話すしかないな……。

「その事なんだが… 実はな…」

「？」

「実は… 護身術部つてのはあくまで部活を作るための言い分でしか無くてな？ 本当はただ単に俺と妹、妹の友人が集まってグダグダ喋つたりしてるだけなんだよ……」

「え？ でも君は凄い強いじゃないか。あの実力は部活で培つたものじゃないのかい？」

「そのトレーニングは毎朝4時にやつてるんだよ。護身術部にはそもそも道場すら無いからな」

「そう… なのか…。 だったら何で今まで僕を誘ってくれなかつたんだい？ 酷いじゃないか。僕と君の仲なのに……」

「あー…、それは悪かつた。でも俺の妹が知らない人間を入れたがらなくてな……」

「ふーん… それで、どうして今になつて部員を増やす気になつたんだい？」

「それは俺にも分からぬ。少し前に『部員を増やさないのか』って聞いた時には、『今まで良い』って言つてたんだがなー」

「ん？ 君が部長じゃないのかい？ さつき君の言つた部員の中では君が2年で後は二人とも1年だるう？」

「そもそも護身術部を作つたのは俺の妹なんだよ。そんでもつて部長も妹なわけ」

「ふむ……（まさか護身術部の実態がそんな物だつたとは…と言つ事は僕が入部しても何ら問題は無く、放課後も十夜と一緒にいられるという事なのかな？ 確か話を聞いた限りでは十夜の妹は中々のブランコンだつて話しだし…これは僕が十夜を奪い取るチャンスが来たつて事だね？ フフフ……）

なんだか思つていたよりも考える時間が長いな……。  
もつと早めに答えを出すと思つてたんだが……。

「あー…それで、答えはでたか？ 僕は入部して欲しいんだが…」

「つ！…君は僕に入部したいのかい？」

「そりや そつだろ。お前なら何にも問題無いし、3人だけつてのも少し寂しく感じてきてな？ それで新しく部員を増やすならお前しかいないと思つたんだよ」

「そ、そうかい…（十夜は僕に入つて欲しいんだ…フフッ嬉しいなあ…）これは絶対に入らないとね。そもそも入らないなんて選択は元々無かつたんだけどね／＼／＼」

「で？ 結論は？」

「勿論入部させてもらうよ  
あ、そうだ。もう一人の…え  
つと、君の妹さんの友人だつて言つ子の事を教えてくれるかい？  
妹さんの方は君から結構聞いてるけどさ、そつちの方はあんまり知  
らないしね」

そう言えば美咲ちゃんの事はあまり話題に出さなかつたつづけ。  
まあ聴里とは何の関係も無かつたしなあ……。

「ああ。その娘の名前は美咲ちゃんって言つて」「ほーらお前ら席につけー。H.R始めんぞー」…あー、また昼休みに話すか

授業の間の時間は教室移動とかで話をする暇があんまり無いし。

「仕方ないね……（美咲：ね、女の子なのか。その娘も十夜に好意を抱いてるんだろうね……）」

「じゃ、また後でな」

「うん。また後で」

いじつして俺は聰里と別れた　いやまあ同じクラスだけど。



キーンゴーンカーンゴーン……

「よし、やつと飯の時間だ……」

「さあ十夜、やつきの話の続きをしようじゃないか」

随分来るのが早いな…チャイムもまだ鳴り始めたばかりなのに。そんなに美咲ちゃんの事を知りたいのかね？

俺たちはお互いに向き合いつつ椅子に座り（聰里は無人になつた机と椅子を借りて）弁当を出した。

「あ、また卵焼きいるか？」

「勿論貰うさ。君の弁当には必ず卵焼きが入つていいんだね」

「まあ場所を埋められるしなー。それに、お前にも毎日あげるわけ

だし

「え？ それってもしかして… 僕の為に作ってきてるって事かい！？」

「別にそれだけってわけじゃないわ。ただ、理由の一つではあるつてだけだよ」

「フフ… そうか… 僕の為に作ってるつて部分もあるんだ…（これは嬉しい事を聞いたなあ… 卵焼きもいつもより美味しく感じる… フツ）」

何か凄い嬉しそうだな… いつも無表情に近い顔がこじまで変わることは…

「聰里つてさ」

「ん？ なんだい？」

「笑顔も可愛いのに、どうしていつも無表情なんだ？ セツチも可愛いとは思うけど… 笑顔の方が可愛いと思うだ？」

「つー？ な、ななな… 何を言つんだ！ ほ、僕は可愛くなんて…」

「いやいや十分可愛いだろう常識的に考えて」

「まつまた可愛いって言つて… そ、そうじやなくて、美咲つて娘の話をするんだろう！ 僕の事なんていいから早くその娘の話をしてくれよ…！」

「えー…、まあ聰里自身がそう言つなら仕方ないか… これ以上言つても聞いてくれなさそうだし…」

「分かつた分かつた。えーと美咲ちゃんはな？ 僕の後輩で零の友人… っていうか親友で、荒っぽい言動のせいで浮いてた零をクラスに溶け込ませてくれた娘なんだよ。」

「零つて言つるのは君の妹の名前だったね… 最近彼女の悪評を聞かな

くなつたのはその娘のおかげって事かい？」

「ああ。ホントに良い娘なんだよ… 雪も良い友人を持つたなあ……」

「ふむふむ…… それで？ その娘は部活で何をしているんだい？」

「別に何をしてるつていうか、唯喋つてているだけだけど… あ、昨日は美咲ちゃんがさ、何故か俺に膝枕してくれつて言つからしてあげたんだけど… 眠たかつたんだなー。膝枕したらすぐに寝ちゃつたんだよ」

あの時の寝顔可愛かつたなー

「なん…だつて…？」

「何を…何をしてるんだ君は…！」

「うお！ いきなりびづいた！？」

突然叫ぶなんてお前は雪か！

「もしかして君は、その美咲という娘と付き合つているのかい…？」  
「え、いや別に付き合つてはいないぞ？ というか膝枕は家で雪に  
もしたし…」

「妹にも…？ もしかして君は僕が言つたら、僕にも膝枕してくれ  
るのかい？」

ブルータス、お前もか。

お前も膝枕か。

俺の太腿で寝る事はそんなに楽しい事なのか…？

「ああ、楽しい。とても楽しいよ。だから僕にも膝枕をしてくれ

「ナチュラルに心を読むな……まあ別に膝枕は良いけど……」「約束だよ？ 嘘だつたら……フフフシ」

キャーッまた背筋がアツー！

…！」の展開、何か覚えがあるぜ……。

「じゃあこれで話は終わり。弁当を食べよ！」話しに集中してあまり食べれて無いからね」

「ん、そうだな。時間もあまり余裕ないし、食べる方に集中しますか……」

「ついして昼休みはすきていった。

しかし膝枕はどこでやるんだ？

まさか…部室、じゃないよな……？

俺とい聰里とい部活勧誘（後書き）

とつあえず一日置きの更新になるかな？

聰里と部員の顔合わせ（前書き）

危なかつたぜ……あと少しで親知らずを抜かなければならなかつた……。

まあこれ以上伸びたらどうち道抜かなきや駄目だひつけどなー……。

## 聰里と部員の顔合わせ

「……」いつが俺が言つてた、今日から新しく部員になる聰里だ。良い奴だし皆仲よくしてくれよ？」

「初めてまして。今十夜が紹介してくれたけど、明石聰里だよ。これからよろしくね？」

今は聰里と話をした時から大分時間が過ぎて、聰里と皆の顔合わせをしている。

はてさて、我らが部長殿はどんな反応を…あれ？ 何か俯いて震えてるんだが……。

「おい、冗談……」

やつと喋ったかと思えば何か声が一段低くなってる！？  
これは刺激しない方が良いかもしれん……。

「何だ我が妹よ」「何だ我が妹よ

「話が違うじゃねーか……」

「え？ 何の事だ？」

「聰里つて奴は男じやねーのかよ……」

「いやいや、誰も男だなんて言つてねーよ……」

勝手に勘違いして怒るんじゃない！

「でも一人称が“僕”なんだつたら普通は男だと思つだろー？

まあそりゃそうだが……

「俺は一言も“男”だなんて言つて無いんだがなー……」

「なー? ぐぬぬ……（チクショー！ あたしのバカ！ ちゃんと性別を聞いておけばよかつた！！……いや、でもまだこの女が兄貴を好いてるって決まつた訳じゃなし……後で理由を付けて聞くしかないか……？）」

今度は黙つて何かを考え出した……忙しい奴だな……。

「あの、十夜先輩？ 新入部員つてなんの事でしょ? つか…？」

え？

「美咲ちゃんは零の奴から聞いて無いのか？」

「ええ、零ちゃんからは何も聞いていませんけど……」

おいおい……。

美咲ちゃんも部の一員だつてのに何で言つて無いんだよ……。まさか忘れてた？ でも今日出た話しだし忘れるような物でも無いと思うんだがな……。

「おい零、何で美咲ちゃんに説明してな……あれ？ 零の奴はどう行つた？ つて聴里の奴もいないじゃねーか」

一体どうしたんだ二人とも……？

「それで、あんたは兄貴の事どう思つてんだ？」

今、あたしは聴里つて奴と一緒に部室がある校舎とは別の校舎にある空き教室にいる。

理由はこいつが兄貴に対してもう一つ感情を持つてるか聞き出すためだ。

これだけ部室が離れていたら話を聞かれる可能性もないしな。鍵も掛けたし。

「どう…とは？ 何の事が僕には分からんんだけど。もう一人の子はそもそも僕が新しく入る事すら知らなかつたみたいだけど、あれはどういう事なんだい？」

「うひ、あれは……」

やべえ、美咲があたしのいない時兄貴にくつ付いたりしないように、新しく部員を入れるなんて言えねーしな……。

美咲の奴に『新入部員を入れる』なんて言つたら理由をしつこく聞かれるだろうし、そのための建前を考えてたらいつの間にか放課後だつたんだけど、美咲には悪い事して：つていやいや！ あれはあたしがいな隙に、兄貴に膝枕なんとしてもらつた美咲が悪いんだ！ 私は悪くない！！

「ねえ考え方の最中で悪いんだけど、結局『どう思つてるんだ』というのはどういうような答えを言えばいいのかな？」

「（そ、そだまづはそっちが先だつた）……じゃあ直球で行くぞ。あんたは兄貴が好きなのか？ それともただの友人でしかないのか？」

？」

「フフツ…それを聞いて何の意味があるんだい？ 君がそれを聞く理由なんて無いじやないか」

「あたしがいない間に、部室で兄貴に変な事をしないか心配してる

からだ！」

「それは美咲つて娘が十夜に膝枕してもらつた事かい？」

な、何で知つて……？

「フフツ、十夜に教えてもらつたんだよ。勿論僕も後で彼に膝枕してもらつけどね？」

……そうだ、さつきの質問の答えだけどね。大好きだよ、僕は異性として十夜を愛している……フフツ、これで満足かな？」

な、なななな……

「ふざけんな！ 何でお前が兄貴に膝枕つて言つか何で兄貴を名前で呼び捨てるつて言つか兄貴はあたしのもんだ！ お前にはやらねーぞ！！」

そ、それに……あ、愛してるだなんてそんな……／＼／＼

「フフツ、ふざけてるだ何でおかしい事を言つね？ まず膝枕の事だが、単に僕がやつてもらいたいからさ。愛する男性が他の女に膝枕をしたなんて聞いたなら我慢できるわけ無いだろ？ 呼び捨ての件だが、それも簡単な事だよ。僕が彼に『呼び捨てで良いか』と聞いたら彼が『別に構わない』と言つたからさ。

……最後の事だけど彼は君の物じやあ無い。今は僕の物でも無いけど、必ず僕の物にして見せるよ？

フフツ、兄離れの用意を済ませておくんだよ？」

そうか、分かつた。

……こいつは本氣で兄貴が好きなんだな……？

「いいさ、分かつたよ！ 今日からあたしとあんたは敵同士だ！」

兄貴は絶対渡さねーからな!?」

「勿論さ。……それよりも、美咲つて娘と十夜は今一人きりになつてると思うんだけど、彼女は十夜をどう思つてるんだい？ 好意は持つてると思うんだけど」

うわー！　忘れてた！！　折角美咲が兄貴と二人きりになるのを阻止するために新しく部員を入れることにしたのに、これじゃあ『ほんまつてんとう』って奴じゃねーかああああああああー！？

「ちくしょう、直ぐに部室に戻るぞ！」

「聴里つて呼んで良いよ。君は僕の義妹になるんだからね……？」フ

「はー！ 言つてろー！ 兄貴は渡さねーからなー！」

とにかく戻らねーと！ 話し始めて10分は経つてゐるし、部室から離れてるから戻るにも少し時間がかかる！ 昨日みたいに美咲がまた変な事兄貴に要求してそーだー！！

「兄貴はあたしが守つて見せる！」

「やれやれ、騒がしいな……（大好きなお兄ちゃんを独占したいだけだろうに）聞いた通りブラコンだな、この娘は（ボソッ）」「「ん」ちや「ん」ちや言ってないで走れ！ 置いてくぞ！？」

聰里の奴足おせーんだよ！

「ちょ！？ 待ってくれよ、君が早いんだ！」

「確かにあたしは早い方だけど、それ以上に聰里が遅いんだよ！」

もういい、置いて行く！スピードアップだ！！

置いて行かないでーー！？

遠くから聴里の叫びが聞こえたような気がしたけど、兄貴を助けるために全力を出したあたしの耳にはその叫びは入ってこなかつた。

聴里と端賣の顔合わせ（後書き）

「...」最近本当に寒くなつておまつたねー。  
でもこも体を冷やせないよひね飯をつかだせー。

俺と美咲ちゃんの... ちょい、も、やめー? (前書き)

やつとこりまで来たぜ……！

実は今までがプロローグ的な何かだったのさー。  
まあ行き当たりばったり＆勢い＋ノリで妄想を書き殴ってるだけだからね、仕方ないね、ホントにね。

気に入らなければブラウザバックをしてくれい！

それが君の為だからな！ たぶん！

## 俺と美咲ちゃんの……ちょっと、止め！？

「それで先輩。新入部員って何の事なんですか？今いた人がそ  
なんですか？」

何故か零と聰里が部室からいなくなつても変わらず、俺は美咲ち  
ゃんから追及を受けていた。

と言つても、普通に考えればただ『そろそろ“同好会  
”からちゃんとした“部”にする為に、新しく部員を入れるんだー』  
的な事を言おうとしてるんだが……。

「ああ、今はいないうきの女子……ああ、男子の制服着てるけ  
ど立派な女の『男子じゃないんですか？』いやだから女の『男  
子ですよね？』……その、女の『男の娘ですよね？』……えーっと  
……」

何故か女子の子つて言わせてくれないし、そのせいで話が進まない  
んだよ……。

一体どうしたんだ美咲ちゃんは？

俺に『女の子』って言わせなければ聰里の性別が男に変わる訳で  
もないし、何より美咲ちゃんの表情的に『女子には見えない』ので  
はなくして、『女子だと信じたくない』って感じなんだよなあ……

もしかして男の友人が欲しかったとか？普段零と一  
緒にいるから美咲ちゃんに寄つて来る男は零が怖くて近寄らないら  
しいし、放課後も護身術部（とは名ばかりのグダグダ部）で零と一  
緒だしな……美咲ちゃんとともに喋っているのは俺ぐらいだからな  
……出会いが欲しかったのか？

でもこの考えが合つてゐるかなんて分からぬし……、素直に聞いて

みるしかないよな。それでちゃんと新入部員についての説明を再開しよう、そうしよう。

よしー、やつとさまつたら早速聞いてみるとこよな。

「嘘!? 新しい新入部員、それも女子! ? しかも先輩と同級生でクールな美少女だなんて…。

そもそも新入部員た何で零ちゃんは嫌がっていた筈。何で今頃……そもそも新入部員を入れる動機は何？ 最近あつた今までと違つた事なんて私が昨日膝枕してもらつた事くらい……つて、まさかこれが

私と十夜先輩を一人きりにしないようにする為なの！？…………でも、さつき見た限りでは雪ちやんは新入部員が女子だつてことに凄い驚いていたし……。

そもそも先輩が、この部が護身術部とは名ばかりのグタグダするだけのだらけ部だつて事を話す相手つて事は、あの男装美少女は先輩とかなり仲が良いつて事になるわ……。しかもこの時期に部に入部するつて事はそれだけ十夜先輩と一緒にいたつて事よね？ だつてあの聰里つて人と私達二人は今まで接点が無かつた訳だし……くうつ！？ 新しく先輩を狙う女が増えたつて事！？ これから一体どうすれば……」

ブツブツ...ブツブツ...ブツブツ...

は、は……話しかけずれ——

何か凄いブツブツ言つてる！？  
声に温度が感じられなくて凄い

怖い！

しかも俯いてるせいで表情が見えないし余計に怖い！！！ これが  
ダークサイドって奴か！？

一体どうした！ 本当にどうした！？ これじゃあ説明できねー  
じやん！

雲達はどうに行つたんだよ！？ 本来は雲が説明しておくれ事だっ  
てのに！！

俺一人で一体どうしたら……

「…仕方無いわ。少しずつ先輩に振り向いてもらおうと思つたけど  
そもそも言つてられないみたいだし…」

おー 美咲ちゃんがダークサイドから戻ってきた！ これなら説  
明できる筈！

「な、なあ美咲ちゃん 「今なら先輩と2人きりだし、今のうちに既成  
事実を作るしかないわね。いえ、今この時間は神様がくれたチャン  
スなんだわ。先輩と既成事実を作つて夫婦になるチャンス……」  
え”？」

ダメだあ！ 戻つてきてないよ！ 完全にあつち側ダークサイドじゃん！？  
まずいマズイまずいマズイ…どうすれば…

「ねえ、先輩？ 十夜先輩…？」  
「お、お…おおつ何、だ？」  
「私と…イイコトしませんか…？」

何か目に光が無いイイイイイイイイイイイイイイイイー！?  
ちょつ、怖い、怖いつて！ 近づいてくんna！ 近づいて来ない  
で！？ 近づいて来ないでください…

「何で逃げるんですか先輩…？ 酷いじゃないですか…私はこんなに先輩を愛しているのに…」

「い、いや。あ、愛って一体何の事だ…？」

本当に分からん。っていうか怖くてちゃんと頭が回らない…。昔、殺氣立つた「ヤ」のつぶ自由業をしてくる強面のお兄さん達と向き合つた時でもこんな事無かつたのに…！

「本当に氣づいて無かつたんですね先輩…。私は、先輩の事が好きなんです。先輩は違うみたいでけどね…」

「いや、俺だって美咲ちゃんの事が好きだぞ…？」

雪の事もあるし、とてもいい娘だし、可愛いし。

「先輩のそれは“友人として”ですよね？ 私は“異性として”先輩の事が好きなんです」

その瞬間、俺の頭は真っ白になつた。  
さつきまで忙しなく回していた思考もあつたらしく止まつてしまつ。それと同時に後ずさつていた体がソファにぶつかってしまったようだ。

俺の体はソファに倒れこんでしまい、更にその上に美咲ちゃんが馬乗りになってきた。

頭が真っ白になつて体も動かせない俺の顔に、美咲ちゃんの顔が寄ってきて…

ちゅう

「んつ…んひゅうつ…」

「んむうつー?...んんつんむうつ

俺と美咲ちゃんの唇が重なってしまった。

バン!

「兄貴! 無事か!? 美咲に何かされて.....え?  
「ゼH...ゼH...し、零...もう少し待つて欲し.....なん...だと  
?」

最悪のタイミングで、いなくなつた2人が帰つてきてしまつたようだ。

え? 良く分からぬいけど本当にヤバくね?

俺と美咲ちゃんの……ちょ、も、やめー？（後書き）

実はタグにある「ヤンデレ」は「(ヤンキー + デレ)」つまり零の事だけを指しているのではなく、「病み + デレ」、つまりは本来の意味の「ヤンデレ」の意味もちゃんとあるのだよー！

……え？ 本来の意味のヤンデレが出てくるのは分かつてた？  
いやいやそんな…………マジで？

まあ流石にずっと美咲をダークサイド状態（病みモード）でこなせはしませんけどね？

それだと守りうとするあるいは主人公や、妹である零、新しく護身術部に入ってきた聰里達全員がヤヴァイ事になる未来しか見えませんし。

作者は鬱展開が苦手です。超苦手です。

通りかかるおえないシリアルな場面とかは頑張つて耐えますけどね……。

タグに「シリアル」なんて入れる気も無いですし、その点は安心してくださいな。

色々言つたけどさ、正直今回の話のシーンだけじゃヤンデレとは言えないよねえ……。あ、13時頃に人物設定も投稿します。

## 人物設定……的な何か（前書き）

キリが良いので連投してみる。  
読みにくかつたりしたらごめんなさい。  
もしかしたら修正入れたりするかもね  
……。

## 人物設定…的な何か

・主人公

名前：瀬川十夜

せがわ  
とおや

年齢：17歳（高校2年生）

身長：180cm

体重：67kg

容姿：黒髪黒目の中等の日本人で、短髪を適当に櫛を入れただけの髪型。顔は中の上といいつた位で、普通にイケメンである。（爆発しき）

能力：運動神経はそこそこ高く、五段階評価の成績でいえば基本4が取れるくらいの万能型（それぞれのスポーツの競技を得意とする人間には勝てない）

ただし喧嘩はかなり強く、そこのチンピラはおろか“ヤ”的な付く自由業の方たちにも勝てるほど強い

頭の方は、英語と数学は壊滅的だがそれ以外は結構できる方。（こんな物いつたい何に役立つてんだー！）

性格：平等。誰に対しても公平に接する。たとえ周りの人間に虐められていたりしても、それに影響されず自分の視野で相手を見る。

趣味：家事、ゲームやアニメ、インターネット、読書等

軽度のオタク（一般人よりはネタに反応し、重度のオタクのネタには付いて行けない事がある）

好きな食べ物：カレー、オムライス、ハンバーグ、グラタン等の子供っぽいものや、しいたけや春菊等の微妙な位置の物まで。

嫌いな食べ物：トマト（生）トマトだけは本気で食べられない。そのくせ加工された物は食えるいう救えない人。自分がトマトを食べられない為、瀬川家ではサラダなどでトマトが出る事は決して無い。

備考：妹や気に入った相手を大事にする。（よくある身内には甘い的な）妹に手を出す奴はデストロイ。（普通の男子は十夜がデストロイする以前に零にデストロイされる）

容姿がそこそこ良く、性格も良いため結構モテるが他人の好意には疎いというエロゲーの主人公みたいなやつ。（爆発しろ）  
ただし、人気なのは女子からであって、男子からは敬遠されている。（零に寄ってきた30人の男子を兄妹で撃退した為）

毎日の日課として、ランニング等のトレーニングを行っている。

実は面と向かつて告白してきたのは神楽美咲（後述）が初めてだつたりする。

その為十夜は初めての告白で頭が真っ白になってしまった。  
その隙を狙われて許してしまったキスは十夜のファーストキスだつたりする。

一日で美少女の手で2つも初めてを体験したね！（爆発しろ）

一人称は“俺”

・主人公妹

名前：瀬川 霞

年齢：15歳（高校1年生）

身長：168cm

体重：（血で隠れて見え無い）

容姿：金髪碧眼で美少女。黙つていればほとんどの人間が見惚れるほど釣り目美少女である。

髪型はポニーテール。巨乳（D）  
言動で損をしているが……

能力：運動神経は高く、それぞれのスポーツの競技を得意とする人間に食らいついて行けるレベル。

喧嘩は兄の十夜には大分劣るが、そこらのチンピラを瞬殺できる程度には強い。

頭は……その……何だ、察しろ。（一言で言つなら“残念”）

性格：性格自体は平等で、本来は誰とも公平に接するが言動が荒っぽく、必要以上に干渉してくる相手には暴力を振るつたりする。

趣味：兄を観察する事、ぬいぐるみ集め（最近は今ある物で満足しているようだ）、マンガやゲーム等

好きな食べ物：カレー、オムライス、ハンバーグ、グラタン等の子供っぽいもの（というか兄貴の作った物なら何でも好きだ！）

嫌いな食べ物：兄と同じくトマト

備考：ブラコン（末期レベル）、兄である十夜の事が大好き。（あにきい～）

普段は荒っぽい言動であるが、本当は素直で幼い性格だったりする。それを見せるのは基本的に兄の十夜限定だが。

彼女の姿に釣られてしつこく話しかけてきたり、終いには体に触れてきた男子を同級生が見ている前で一撃で気絶させたため、クラスでは一時期浮いてしまっていた。

現在では友人である神楽美咲（後述）のおかげで少しずつ溶け込めているようだ。（それでも彼女に手を出そうとする人間はいないが）神楽美咲に目の前で十夜のファーストキスを奪われた彼女の心境は……？

護身術部を創設。

ただし彼女にやる気は無く、創設理由が「学校でも兄貴と一緒にいられる場所が欲しいから」だつたりするため、部活として一切機能していない。

“護身術部”という部の名前もただ単にそれっぽい名前で部を作るためでしかなかつたりする。

実質の所、「護身術部」と言つよりは「だらけ部」である。

一人称は“あたし”

十夜の友人

名前：明石聰里あかしきとり

年齢：16歳（高校2年生）

身長：152cm

体重：（メメタアツ！）

容姿：茶髪のロングを背中におろしている僕っ娘。

主人公はボーイッシュなどと言つたが普通に美少“女”である。普通乳（C）

能力：運動神経は平均よりかなり低め。

喧嘩なんぞした事が無い。（まあ暴力なんて普通、そう簡単に振るうものではないが）

そのかわりと言つては何だが頭がかなり良く、数学と英語が全くできない十夜に教えてあげていたりする。（これがあるため十夜は赤点を回避できている）

性格：冷静

何事も一步引いた感覚で接する。

趣味・音楽、映画観賞、読書、十夜を観察する事等

好きな食べ物・何でも美味しい食べる（特に十夜の作った物なら……フフツ）

嫌いな食べ物・無し

備考：何事も一步引いた感覚で接するため、これといった友人がいない。しかし十夜だけは別で、友人というか寧ろ恋人になりたい。とりあえず鈍感な十夜に自分を女と意識させたいが、恋愛では完全に奥手なので上手く行つてい無い。

挙句の果てに目の前で十夜の唇を奪われる始末。

最近十夜のいる護身術部の存在を知り（十夜は彼女に自分が入つている事を教えただけで誘う事をしなかつた）話を聞いた当初は入部も考えたが、自分は運動神経が切れているため無理だろうという結論に達し、入部を諦めた。

しかし護身術部の実態を知り、更には十夜が入つて欲しいと言つたため自分も入る事に決めた。

本人曰く、「十夜がどうしてもつて言うから入るのさ。別に僕は付き合つてあげるだけだよ」とのこと。……まあ本当は十夜と放課後も一緒にいられるようになつて凄い嬉しかつたりするけど。

女子でありながら男子の制服を着ており、その理由は「スカートは面倒くさい」という単純な物であり、実は他に深い事情があつたりする……なんて事も無い。

初登場した話では、「十夜が私（聰里）について考えている事なら分かる」というような事を言つたが、それは彼女自身にある程度の

観察眼があり、更に普段から觀察している十夜本人が感情が表に出やすい人間であることも重なっているだけで、別にそういう能力がある訳では無い。

一人称は“僕”

雫の友人

名前：かぐらみさき神楽美咲

年齢：16歳（高校1年生）

身長：162cm

体重：（アツ　！）

容姿：肩まで伸ばした綺麗な黒髪で和服が似合う大和撫子な美人さん。口元に黒子がある。

目つきは若干のたれ目で、某魔法先生に出てくるサムライマスターの娘さんに大人っぽい雰囲気を足したような感じと言うと想像しますいか？（髪は短めだけど）爆乳さん（E）

能力：運動神経は一般女子よりは上。

喧嘩？した事あるわけが無いだろ？GA！

5教科のうち数学と理科、英語は得意だが、国語や社会はできないという完全な理系（？）さん。（これ以外の3つは完璧なんだけどね……）

性格：平等（？） 社交的  
実は腹黒いという噂も。  
しかもヤンデレっぽい……

趣味：三味線とか琴とか和っぽい物

好きな食べ物：和食

嫌いな食べ物：辛い物（カレーは甘い物なら食べられる）

備考：人当たりが良く、クラスから浮いていた零を受け入れさせたことからも良く分かる。

実は零に近づいたのは零の兄である十夜が好きだからだつたが、零が決して悪い人間ではない事が分かり、ちゃんとした友人になった。知り合いが多いが本当の友人がいない彼女にできた初めての友達だつたりする。

…………何か百合っぽい事を考えてたりしますが、決してそのような事実はございません。

十夜のファーストキスを奪つちゃつた人である。

一人称は“<sup>わたし</sup>私”

知り合いのお姉さん

名前：響静音  
ひびきしづね

年齢：（ちよつやめ！？）

身長：173cm

体重：（ドグシャアツ）

容姿：黒髪黒眼。背中まで下ろしたサラサラの黒髪や、おつとりとした雰囲気をが特徴的なお姉さん。

魔乳（F…ダト…？）

能力：毎朝のランニングで十夜の速度に最後まで付いていける事や、その速度を維持しながら十夜と話し続けても息切れしない事から、かなりの体力を持つ事が分かる。

性格：包容力満載のお姉さん氣質？

趣味：不明

好きな食べ物：不明

嫌いな食べ物：不明

備考：十夜が行っている毎朝のランニング時にいつも鉢合わせする、恐らく近所のお姉さん。

“近所の”の前に“恐らく”が付いたり、性格の部分に？が付いたり趣味や食べ物の所が“不明”になっているのは十夜自身が早朝ランニング以外の時に会ったことが無いから。

限られた時間にしか会ってはいないのだが、静音は十夜に対してか

なりの好意を抱いているようだ。

何やら嗅覚も強いようで、十夜に付いた（付いている）零の匂いも嗅ぎ取つてしまふほどである。

しかも発言的に本性を隠しているようで、中身はおつとりとしたお姉さんでは無く典型的ヤンデレ人格が本性のようだ。

……誰かに似ている……？

一人称は“わたし”（私と漢字は使わない）

瀬川兄妹の両親

父

名前：せがわあさかず瀬川朝一

母

名前：アリシア・瀬川

備考：瀬川十夜、零の両親。

現在は海外へ朝一が単身赴任し、それにアリシアが付いて行つたため二人とも日本にはいない。

朝一は完全な日本人だが、アリシアはアメリカ人と日本人のハーフである。

アリシアはアメリカ人の血が濃いのか綺麗な金髪と碧眼であり、そ

の美しさは娘の零にも遺伝している。

年齢的にはそこそこ行っている筈なのだが、外見は20代でも通じるほどである。

朝一の仕事は不明であり、自分の息子と娘には話していない。  
別に危険な仕事ではないので心配は無用らしい。

アリシアは専業主婦。

一応英語は話せるが、生まれも育ちも日本であるため得意ではないとか。

ここまで適当に設定を考えたが、朝一とアリシアを本編で登場させる気はあつたり無かつたりあつたり無かつたり無かつたり無かつたりする無かつたりする。

……無かつたりする。

## 人物設定、的な何か（後書き）

とうあえずこんな感じで。

まだ載せていない設定もあるけど、それは本編で出るんじゃないだろうか。

出した時はどうしようかなあ……」の設定集に書き足すか、それとも設定集<sup>2</sup>的な感じで新しく投稿するか…悩むな……。

## 俺と妹と脇里と美联ちゃんの修羅場（？）（前書き）

迷彩です……執筆中、何故かデータが飛びました。それはこの話がほとんど書き終わる直前の事だったとです。

迷彩です……最近話の展開がつまらへ浮かばないとです。

迷彩です……正直言つてもつ少し感想が欲しいとです。（願望）

迷彩です……迷彩です……迷彩です……。

俺と妹と聰里と美联ちゃんの修羅場（？）

「んにゃあ…兄貴…」

「はあ…明日はどうしたもんか…」

現在俺は妹に抱きしめられています。

あの後俺と雫は家に帰ってきたんだが……。  
色々あってまた雫と一緒に寝る羽目になつたぜ。  
とりあえずあの後どうなったのか回想に入るとしよう。

「おい美咲…？ テメ何してやがんだ……？」

「僕の十夜に一体何をしてるんだい……？」

「あら、二人とも分からぬのかしら？ キスに決まってるじゃない

い

ヤバい、普段ムスッとしてる雫の表情が完全な無表情になつてゐる。  
しかも口調もいつも以上に荒くなつてゐるし、ヤンキーモードに移  
行したっぽいな。

……普段俺には見せないのに、俺の目の前であんなつて事はそ  
れだけ怒つてるつて事か……。

聰里も無表情ではあるけど、思いつき額に青筋ういてるし。  
といつか聰里。お前はどうかに紛れて何を言つてるんだ……。

美咲ちゃんもそんなあからさまに挑発するのは止した方が……。  
口調もさながらそんな胡散臭い笑顔でいつたらそれこそ火に油を  
注いでるようなものだらうに。

まだ完全にはヤンキー mode に移行してる訳でもないみたいだし、  
ちゃんと謝つたらまだ間に合つレベルの筈だぞ……？

「んな事聞いてんじゃねえよ… テメエがなんで兄貴にキスしてん  
だつて聞いてんだろうが！ あア！？」

「（ヒクッ）そ、そ、うだよ、何を勝手にキスなんてしてんかい？  
まさか勢いだなんて言つんじゃないだらうね……？」

「あ…あ、あらあら。別にキス程度構わないでしょ？ 減る物でも  
ないんだし」

ほり、雲が完全にヤンキー mode に移行しちゃつたじゃないか。  
聰里は…ちょっと雲にビビつてたけどすぐ持ち直したみたいだな。  
美咲ちゃんは手が震えてるけど。

「おい兄貴！」

「え？ 僕？ このタイミングでか…？」

「兄貴はキスって初めてだよなア！？（つてかあたしの知らない所  
でキスとかしてたら……コルサナイ）」

「え？ ああ、確かにキスなんて初めてだけど……っ！？」

「そうだ、俺ファーストキスじゃん。」

「減るもんじやねーよ無くなるもんだよ……。」

「気が合いますね先輩！ あたしもファーストキスだつたんですよ？」

「「テメー（君は）は黙つてろ」 「はい……」

「うわあ、俺ファーストキス奪われちゃつたんだ……ハハハッ。  
もうお婿に行けない……。○rz

心から好きになつた人の為に取つておこいつて決めたのに……。

女々しいだ？ そんな事はしらん！

俺が決めた事を他人にどうひと言われる筋合には無い……！

ま、その「決めた事」ももつ無意味ですけどねー……ハハハハハッ  
……はあ……○rz

とりあえずもつ過ぎた事だ。今は現状を把握する事に努めよつ。

「おい美咲イ……お前覚悟出来てんだるうなア？」

「十夜のファーストキスを奪うなんて許せないなあ……これはお仕置  
きが必要だね……？」

「あらあら、あなた達何をする気かしら……？」（ダラダラ）

こりゃいかん。

雪と聰里の怒りが天元突破してゐる。

というか何で二人がそんなに怒つてるんだ？

一番怒つて……いや、怒つてはいないな。

一番悲しいのはファーストキスを奪われた俺なんだが……。

美咲ちゃんも流石にヤバい状況だつて事に気付いたようで、冷や  
汗をダラダラながしていて全くと言つていいほど冷静さを裝えてい

ない。

「つーか一人とも何をする気だ……？」

「流石に兄貴のファーストキスを奪った責任は重いぜ……？ 残念ながらあたしは平和主義者じゃねーからなア……。時には暴力を振るう事もあるよなア……？」

「フフシ、僕は普段暴力を振るう事なんて無いんだけどね？ 流石に今回は許せないなあ……。（スッ）」

「あ、あらあり……？（ニ）これは流石に…逃げた方がいいかしら……？」

暴力ですか。 そうですか……。  
って流石に暴力は不味くない！？

「お、おいー一人とも。 流石に暴力！」 「兄貴は（十夜は）黙つてろ！（黙つててー！）」 「はい……」

ダメだ。 無理だ。 怖い。 止められるわけが無い。 にやんこ撫でたい犬でも良い（ 現実逃避）

「（流石に分が悪い…）三十六計逃げるに如かず！（ダツ）」

「待てやじりア！ あたしから逃げられると思つてんかアー…？（ダツ）」

「許さない。 絶対に許さない。 許さないゆるさないコルサナイ……（ダツ）」

はあ… 今日の晩飯はなににしようかな……。

○

……おや？ いつの間にか結構時間が経つていたようだ。  
時計を見ると、部活が始まったのが（活動と言えるような事はしない）が今更な事である）四時半頃で、そこから1~5分くらい経つてからあの修羅場（？）が始まつて……。

そこからあまり記憶が鮮明じやないけど……とりあえず今のじかんは5時半。

修羅場の空気は途中から無くなつていった気がするから（三人が部室から消えた為）、かなり長い間俺はあつちの世界に行つてたんだな……。

というか三人ともいなつて事はもつ帰つたのか？いやでも……

ガチャッ

「あれ、兄貴？ まだここにいたのか」

「ん？ 雲？」

「お前帰つたんじやなかつたのか？」  
「美咲を追いかけて行つたんだけどな。あいつ途中でタクシーに乗りやがつて……」

なるほど。流石に車には勝てないから荷物を取りに戻つてきたの

か。

でもどんだけ追いかけてたんだよ……。

「じばらぐの間はタクシーを追いかけてたんだけどなあ……気づいたらあんまり知らない所に出てたから帰つてくるのに苦労したぜ」「そ、そつか……」

ま、まあ車のストレスもかなり解消されたみたいだしいいのか……？  
ヤンキーモードになつて無いつて事はそういう事なんだろう。

あ、そういえば……

「聰里はどうした？ 一緒にいなくなつたんじや……」

「あいつはすぐバテやがつたからな……途中であいつの家にあたしが運んでやつたんだよ。その間に美咲がタクシー呼んだみたいでな……あいつのせい……（ブツブツ）」

え？ 一回完全に見失つた状態からタクシーに乗つた美咲ちゃんを見つけて、そこから暫く追いかけ続けたのか？ しかも車相手に？ ……なにそれこわい。超怖い。まあ俺も多分できるけど。

「それで今帰つてきたのか」

「しかも聰里の荷物も届けてやらないと駄目でなあ。これからダッシュであいつの家まで行つて来るから兄貴は先に家に帰つてくれよ。買い物もあるんだろ？」

「あ、ああ。分かった。……寄り道するなよ？」

「しねーよー……兄貴。今日は覚悟しろよ？」

え？

「（分かってねーな……）兄貴の唇、あたしももりうからな？」「ちよつ何言つて、「じゃああたしは荷物届けてくるから！」あ、おい！」

「これは……まだ助かつてはいないようだ……ハア……。」

（次回に続く）

俺と妹と聰里と美联ちゃんの修羅場（？）（後書き）

辛いべや。色々な意味で。  
感想も欲しいけどPS3も欲しいな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3253y/>

俺の妹はヤンキーっぽい美少女である

2011年11月27日12時57分発行